
比 企 郡 吉 見 町

西吉見条里遺跡Ⅱ

社会資本整備総合交付金（河川）工事関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2015

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、県政運営の基本となる5か年計画で「安心の確認、成長の実現、そして自立自尊の埼玉へ」を進むべき進路と定め、様々な施策に取り組んでいます。大規模災害への備えはその大きな戦略の一つです。河川については、時間雨量50mmの降雨でも氾濫しない治水環境や施設の整備に取り組んでいます。

吉見町の水田地帯を流れる市野川の河川改修事業は、こうした施策の一環で、水害の少ない、安全で住みよいまちづくりと自然との共存を目指したものです。

この事業地内には、大規模な古代の道路跡や集落跡などが存在し、今回発掘調査を行った西吉見条里遺跡もその一つです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、埼玉県東松山県土整備事務所の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

今回の調査では、古墳時代の溝跡をはじめ、古代の水田跡や水路跡などが発見されました。特に、水田跡は奈良時代から平安時代にかけて営まれたもので、条里水田との関連がうかがえる貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県東松山県土整備事務所、吉見町教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成27年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 樋 田 明 男

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡吉見町大字西吉見に所在する西吉見条里遺跡第23地点の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

西吉見条里遺跡（第23地点）(No.38-047)
埼玉県比企郡吉見町大字西吉見425番地他
平成24年9月4日付け 教生文第2-36号
3. 発掘調査は、一級河川市野川改修事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県東松山県土整備事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成24年度）
「地域自主戦略交付金（河川）工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）」
整理・報告書作成事業（平成26年度）
「社会資本整備総合交付金（河川）工事（埋蔵文化財発掘調査整理業務委託）」
5. 発掘調査、整理・報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成24年9月1日から平成25年3月29日まで吉田 稔、青木 弘、大和田 瞳が担当して実施した。
- 整理・報告書作成事業は、平成26年11月4日から平成26年12月26日まで大谷 徹が実施し、平成27年2月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第415集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。
7. 発掘調査における空中写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は吉田、青木、大和田が行い、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
9. 出土品の整理・図版作成は大谷が行った。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、他は大谷が行った。
11. 本書の編集は大谷が行った。
12. 本書にかかる諸資料は平成27年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査や本書の作成にあたり、吉見町教育委員会をはじめ下記の方々、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

江原昌俊 太田賢一 加藤恭朗 佐藤幸恵
柳楽 理 藤野一之 三原翔吾 宮島秀夫
矢口翔馬 弓 明義

凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

WW-42グリッド北西杭の座標は、 $X = 3030.000\text{m}$ 、 $Y = -36230.000\text{m}$ 、北緯 $36^{\circ} 01' 35''$ 8906、東経 $139^{\circ} 25' 52''$ 8032である。

2. 調査で用いたグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。

3. グリッドの名称は、北西隅杭を基点に、北から南方向にアルファベット、西から東方向に数字を付し、両者を組み合わせて、A-1グリッド等と表記した。

なお、アルファベットについては、はじめAからZまでを使用した後、二順目をAAからZZ、三順目をAAAからZZZと、頭文字を重ねて表記した。

4. 本書の本文・挿図・表等に用いた遺構の略号は以下のとおりである。

溝跡：SD 土壇：SK 水田跡：SN
ピット・柱穴：P

5. 調査時点において調査区の呼称を調査区①、調査区②、調査区③、調査区④と表記したが、整理時点で1区、2区、3区、4区に表記を変更した。

6. 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全体図 1/750
遺構図 1/60・1/70・1/80・1/100・1/120
1/200

縄文土器 1/3 土師器・須恵器・陶器 1/4
木製品 1/5

7. 遺構断面図に記した水準値は、すべて海拔標高（単位m）を表す。

8. 遺物実測図中の断面表記は、須恵器を黒塗りとした。

9. 遺物観察表の表記基準は以下のとおりである。

・種別は縄文土器、土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器、土師質土器と表記した。

・遺物の計測値はcm、重さはgを単位とする。

・土器計測値の（ ）は復元推定値、[]は残存高を示す。

・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
E：石英 F：軽石 G：砂粒子

H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質
K：黒色粒子 L：その他

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・色調表現は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』によった。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No、成形・調整、使用痕、生産窯、年代等を記した。

10. 本書に使用した地形図類は、国土地理院発行の1/50,000地形図、吉見町発行の1/2,500都市計画図を編集のうえ、使用した。

11. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、巻末に掲載した。

目次

序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	13
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 溝跡	13
2. 発掘調査・報告書作成の経過	1	2. 土壌	19
(1) 発掘調査	1	3. 水田跡	19
(2) 整理・報告書の作成	2	4. 沼地・河川跡	25
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	5. グリッド出土遺物	29
II 遺跡の立地と環境	3	V 調査のまとめ	30
1. 地理的環境	3		
2. 歴史的環境	4	写真図版	
III 遺跡の概要	7		

挿図目次

第1図 埼玉県 の地形	3	第15図 第8～12号溝跡(2)	18
第2図 周辺 の遺跡	5	第16図 土壌	19
第3図 遺跡周辺 の地形図	6	第17図 3区水田跡(1)	20
第4図 基本土層	7	第18図 3区水田跡(2)	21
第5図 調査区位置図	8	第19図 3区水田跡(3)	21
第6図 グリッド配置図	9	第20図 3区水田跡1出土遺物	22
第7図 調査区全体図(1)	10	第21図 3・4区水田跡全体図	22
第8図 調査区全体図(2)	11	第22図 4区水田跡(1)	23
第9図 調査区全体図(3)	12	第23図 4区水田跡(2)	24
第10図 第1・2号溝跡	13	第24図 4区水田跡(3)	25
第11図 第3・4号溝跡	14	第25図 4区河川跡1	26
第12図 第5号溝跡	15	第26図 4区河川跡1出土遺物	27
第13図 第6・7号溝跡	16	第27図 グリッド出土遺物	29
第14図 第8～12号溝跡(1)	17		

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	4	第4表	3区水田跡出土遺物観察表	22
第2表	第4号溝跡ピット計測表	14	第5表	4区河川跡1出土遺物観察表	28
第3表	第12号溝跡ピット計測表	17	第6表	グリッド出土遺物観察表	29

写真図版目次

図版1	1	西吉見条里遺跡第23地点 (合成)	2	第8・9号溝跡
図版2	1	西吉見条里遺跡遠景(南から)	3	第10号溝跡
	2	西吉見条里遺跡遠景(南東から)	4	第11号溝跡
	3	西吉見条里遺跡近景(南から)	5	第12号溝跡
	4	西吉見条里遺跡近景(西から)	6	第1号土壙
	5	1区近景 (南から)	7	第2号土壙
	6	1区全景 (南から)	8	第3号土壙
	7	2区全景 (北から)	図版6	1 3区水田跡全景
	8	2区全景 (南から)	2	3区水田跡1
図版3	1	3区近景 (西から)	3	3区水田跡2～4
	2	3区全景 (北から)	4	4区水田跡1
	3	3区全景 (南から)	5	4区水田跡2 (1)
	4	4区近景 (南から)	6	4区水田跡2 (2)
	5	4区全景 (北から)	7	4区水田跡4 (1)
	6	4区全景 (南から)	8	4区水田跡4 (2)
	7	1区西壁土層断面 (VV-41・42G周辺)	図版7	1 4区水田跡5
	8	1区西壁土層断面 (OOO-57・58G周辺)	2	4区水田跡6～8
図版4	1	第1号溝跡	3	4区水田跡8・9
	2	第2号溝跡	4	1区沼地3
	3	第2号溝跡土層断面	5	1区河川跡4
	4	第3号溝跡	6	4区河川跡1
	5	第4号溝跡	7	4区河川跡1 木製品出土状況
	6	第5号溝跡	8	4区河川跡2
	7	第5号溝跡土層断面	図版8	1 3区水田跡1 (第20図1)
	8	第6号溝跡	2	縄文土器 (第27図1・2)
図版5	1	第7号溝跡	3	4区河川跡1 (第26図22)
			4	4区河川跡1 (第26図1～21)
			5	グリッド (第27図3～13)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では平成24年度から平成28年度の新5か年計画『埼玉県5か年計画－安心・成長・自立自尊の埼玉へー』において「危機・災害に備える」という基本目標を掲げ、その一環として治水・治山対策の推進を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

一級河川市野川改修事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成24年3月26日付け東整第2072号で東松山県土整備事務所長より生涯学習文化財課長あて照会があった。

生涯学習文化財課では確認調査を実施し、その結果をもとに平成24年7月5日付け教生文第651－1号で西吉見条里遺跡の取り扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
西吉見条里遺跡 (No.38-047)	集落跡 条里跡	古墳 奈良 平安	比企郡吉見町大字西吉見地内

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

西吉見条里遺跡第23地点の調査は、一級河川市野川改修事業に先立ち、平成24年9月1日から平成25年3月29日までの7箇月にわたって実施した。調査面積は5,261.2㎡である。

調査は1区から4区の順に実施した。1区は9月初旬から中旬にかけて重機による表土除去作業を行い、併せて補助員による遺構確認作業に着

2 取扱について

埋蔵文化財が所在する範囲について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

発掘調査については、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と東松山県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成24年9月1日から平成25年3月29日までの期間で実施することになった。

文化財保護法の規定による埋蔵文化財発掘調査通知が埼玉県知事から提出され、同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下の通りである。

平成24年9月4日付け 教生文第2－36号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

手した。9月下旬の豪雨により調査区の一部が崩落したため、安全対策を講じ、危険箇所の埋戻しと調査再開のための復旧工事を行い、11月中旬までに調査を終了した。

2区は、調査予定地内の樹木の伐採終了をまって、11月下旬に表土除去作業を開始した。並行して調査の終了した1区を埋戻し、2区の表土除去作業終了後、引き続き3区の表土除去作業を12月

上旬から中旬にかけて行った。2区、3区の遺構精査・記録作成作業を進め、12月下旬に2区の調査を終了し、埋戻した。

1月末には3区の調査を終え、調査区の埋戻し終了後、2月初旬に4区の表土除去作業に着手した。検出した水田跡や河川跡などの精査・記録作成作業を進め、3月中旬に4区の調査を終了し、器材の撤収、発掘事務所の撤去及び調査区の埋戻しを行い、3月下旬にすべての作業を終了した。

なお、基準点測量は調査の進捗状況に合わせて1区を9月中旬、10月上旬、10月末から11月初旬の3回に分けて、2区を12月初旬、3区を12月末から1月上旬、4区を2月上旬にそれぞれ実施した。同様に空中写真撮影も11月下旬、1月下旬、3月上旬の3回に分けて実施した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成作業は、平成26年11月4日から平成26年12月26日までの2箇月間実施した。

11月上旬から出土遺物の水洗・注記を開始し、

直ちに接合、石膏による補強復元に着手した。接合・復元を終えた遺物は、順次機械や手測りによる実測・手描きトレース・採拓を行い、遺物図版の版組を行った。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えて第二原図を作成した。その後、第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

11月下旬から12月下旬にかけて遺構・遺物図版の割り付け、遺物の写真撮影と写真図版の作成を行うとともに、原稿執筆と編集作業を行った。

12月末に原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成27年2月23日に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、12月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成24年度（発掘調査）

理事長	中村英樹	調査部	
常務理事兼総務部長	根本勝	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	剣持和夫
総務部副部長	富田和夫	調査監兼調査第一課長	瀧瀬芳之
総務課長	矢島将和	主査	吉田稔
		主事	青木弘
		主事	大和田瞳

平成26年度（報告書作成）

理事長	樋田明男	調査部	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	富田和夫
総務部副部長	瀧瀬芳之	主幹兼整理第二課長	大谷徹
総務課長	藤倉英明		

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

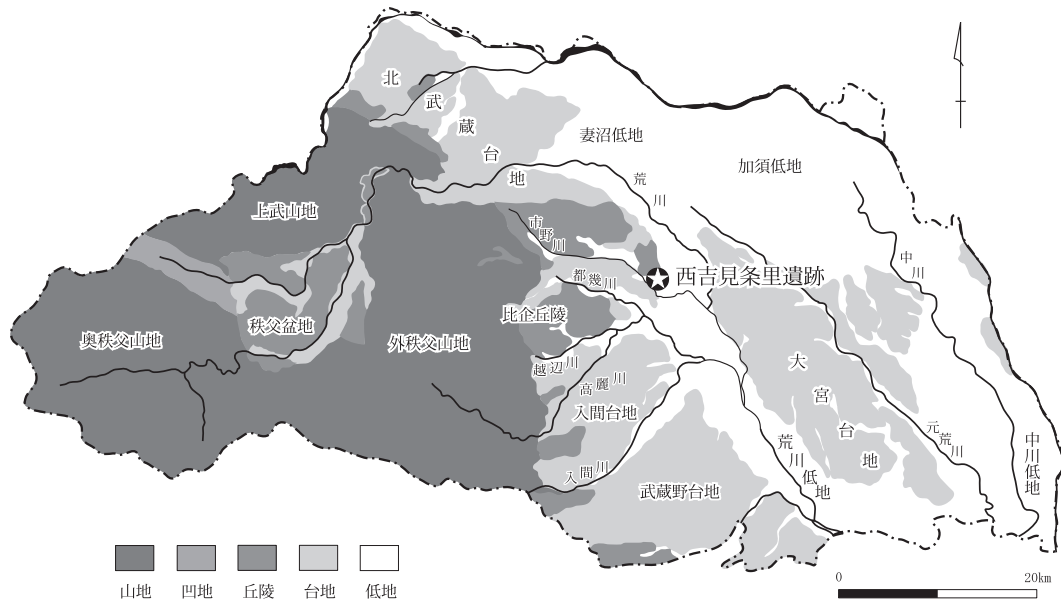
西吉見条里遺跡は吉見町の南西部、JR高崎線鴻巣駅から西に約8km、東武東上線東松山駅から東に約2.8kmの比企郡吉見町大字西吉見に所在する。市野川と吉見丘陵に挟まれた市野川左岸の沖積低地上に立地し、遺跡の標高は14m前後である。市野川を挟んだ対岸には、東松山市街地を乗せる松山台地が広がっている。

遺跡の所在する吉見町は、埼玉県のほぼ中央に位置し、西は市野川を隔てて東松山市、南は川島町、東は荒川を境にして鴻巣市、北は熊谷市とそれぞれ接している。町域のほとんどを占める東側の平野には、古くから「比企の穀倉」と呼ばれた豊かな田園風景が広がっている。近年はイチゴの栽培が盛んで、県内有数の生産量を誇っている。

これに対し、西側の吉見丘陵は、比企丘陵とともに新第三紀中新統（凝灰岩、泥岩など）からなり、斜面上は関東ローム層に覆われている。丘陵の東側は、支脈の基部や大小の浸食谷に多くの溜池が存在し、灌漑用水として水田を潤す。丘陵の西側では滑川と市野川が南流し、吉見丘陵の先端

付近で合流した後、やがて荒川に流れ込んでいる。当地は和田吉野川と市野川に挟まれた低地帯であるため、明治43年の大洪水以降、昭和11年の市野川改修事業の竣工まで、度々洪水の被害を蒙っていた。

荒川は、中世段階には吹上から南下して吉見方面へ向かって流れていたと考えられている。『荒川流域地形分類図』（大矢他1996）には「吉見町中曾根から上砂、本沢、小新井、中新井、今泉には、激しく蛇行する旧河道が認められ、同町下銀谷～大和田～古名を経て荒川堤外地へ連続する。この旧河道のさらに西側には、大里村小八林から吉見町松崎～御所～久保田～江鋼～大串をへて川島町へつづく大規模な自然堤防が認められる」と記されている。後述する御所遺跡や三ノ耕地遺跡を乗せるこの自然堤防は、本遺跡の東側に接しており、幅約500mで、大きく蛇行し、その波長は市野川を挟んだ区間で4kmに達する大規模なもので、現在の荒川を上回る流量の河川によって形成されたものと推定されている。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

吉見町では現在のところ旧石器時代の遺跡や遺物は発見されておらず、周辺で東松山市上川入遺跡(72)からナイフ形石器が出土したのみである。

縄文時代の遺跡は、丘陵と沖積低地を主体とする町の地形的な要因のため、全体に数は少ない。早期の遺跡は、松山台地の東松山市五領遺跡(62)で井草式・夏島式が主体の撚糸文土器が出土しているほか、吉見丘陵の北側に広がる江南台地の田原古墳群内で条痕文土器が出土している。

前期の遺跡は、荒川低地の自然堤防上の川島町芝沼堤外遺跡から諸磯式土器の良好な資料が出土している。吉見町では吉見丘陵内の大沼に面する大行山遺跡(44)、市野川流域の西吉見条里遺跡(1)で前期の遺構や遺物が検出されている。

中期の遺跡は、大行山遺跡で加曾利E式土器を主体とする竪穴住居跡4軒が調査されている。周辺には松山台地南縁の東松山市山王裏遺跡(71)、松山台地北縁の前山遺跡がある。

後期から晩期の遺跡は、和田吉野川の形成した自然堤防上に立地する三ノ耕地遺跡(12)、倉敷遺跡(10)、御所遺跡(17)があり、低地部を中心に遺跡数が増加する。このうち三ノ耕地遺跡では、後・晩期の竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構3基、水場遺構1基が検出され、集落の様相が明らかにされた。一方、吉見丘陵内でも称名寺式期から堀

之内式期にわたる集落跡が二十二耕地遺跡(54)で確認されている。

弥生時代前期にさかのぼる遺跡は現在発見されていない。中期の遺跡は、大行山遺跡から宮ノ台式期の竪穴住居跡12軒と方形周溝墓1基が検出されている。

後期の遺跡は、吉見丘陵内の八耕地遺跡(87)と久米田遺跡(41)で調査が行われている。八耕地遺跡では方形周溝墓と思われる溝跡から吉ヶ谷式土器が出土し、久米田遺跡では竪穴住居跡2軒が調査された。周辺では市野川と滑川に挟まれた台地縁辺の東松山市八幡遺跡(58)、市野川右岸の吉ヶ谷式期の大型方形周溝墓から鉄剣や鉄釧が出土した観音寺遺跡(61)が所在する。

古墳時代前期の遺跡は、台地や丘陵上に広く分布しているが、特に沖積低地内の自然堤防上への進出が顕著となる。市野川が形成した入り江状の沖積低地を眼下に望む五領遺跡では、畿内や東海・山陰地方などの外来系土器が数多く出土し、遠距離間交流の結節点として位置づけられる。周辺の低地部では埋没河川を再掘削した水路跡も発見されており、開発が積極的に推し進められたことを物語る。農耕具類の鉄器化によって、生産力の向上が促進され、地域社会は急速に統合していったことは想像に難くない。その帰結として、三ノ耕

第1表 周辺の遺跡一覧表

1 西吉見条里遺跡	2 古代道路跡	3 江口遺跡	4 西間ノ田遺跡	5 散布地(江鋼)	6 散布地(上銀谷)
7 番場遺跡	8 志久遺跡	9 南間ノ田遺跡	10 倉敷遺跡	11 北間ノ田遺跡	12 三ノ耕地遺跡
13 合田遺跡	14 原遺跡	15 散布地(久保田)	16 下遺跡	17 御所遺跡	18 源範頼館跡
19 稲荷前遺跡	20 御所稲荷塚古墳	21 外宮遺跡	22 万神遺跡	23 神代遺跡	24 茶白山古墳群
25 黒岩横穴墓群	26 五ノ谷遺跡	27 四ノ谷遺跡	28 三ノ谷遺跡	29 二ノ谷遺跡	30 八ノ谷遺跡
31 散布地(北吉見)	32 三十七耕地遺跡	33 四十一耕地遺跡	34 十三塚	35 丸山遺跡	36 和名遺跡
37 山の上遺跡	38 山の根古墳	39 和名埴輪窯跡群	40 三塚古墳群	41 久米田遺跡	42 日向山遺跡
43 久米田古墳群	44 大行山遺跡	45 庚申塚遺跡	46 散布地	47 羽黒山古墳	48 松山城跡
49 稲荷塚古墳	50 吉見百穴横穴墓群	51 七耕地遺跡	52 十耕地遺跡	53 十五耕地遺跡	54 二十二耕地遺跡
55 小橋遺跡	56 沢口遺跡	57 坂本遺跡	58 八幡遺跡	59 上松本遺跡	60 下松古墳群
61 観音寺遺跡	62 五領遺跡	63 見入遺跡(鷲大神社遺跡)	64 仲城遺跡	65 天神山遺跡	66 柏崎11号墳
67 権現塚古墳	68 柏崎13号墳	69 雷電塚古墳	70 柏崎16号墳	71 山王裏遺跡	72 上川入遺跡
73 西浦遺跡	74 野本氏館跡	75 野本將軍塚古墳	76 祇園在家遺跡	77 天神遺跡	78 野本4号墳
79 野本5号墳	80 野本7号墳	81 古吉海道遺跡	82 おくま山古墳	83 柏崎古墳群	84 番清水遺跡
85 鷲神社裏遺跡	86 かんべ塚古墳	87 八耕地遺跡	88 天神山古墳		



第3図 遺跡周辺の地形図

地遺跡では3基の前方後方形周溝墓が築造されるとともに、遺跡を見下ろす吉見丘陵縁辺に全長約55mの前方後方墳である山の根古墳(38)が築造された。一方、市野川を挟んだ対岸の松山台地にも根岸稲荷神社古墳や天神山古墳(88)等の前方後方墳が集中して築造されている。

中期の遺跡は、前期に比べ大きく減少し、わずかに吉見丘陵内の久米田遺跡や松山台地の東松山市番清水遺跡(84)が知られるのみとなる。

古墳時代後期になると、一転して遺跡は急激に増加する。大規模なものでは、江南台地の田甲原遺跡、松山台地の東松山市番清水遺跡、観音寺遺跡、八幡遺跡等が挙げられる。この頃には古墳群の築造も活発となり、吉見丘陵周辺では久米田古墳群(43)、大行山古墳群、田甲原古墳群が形成される。中でも久米田古墳群中のかぶと塚古墳は、複室構造の切石切組積み横穴式石室をもつ大型の円墳で、石室内部からは多量の須恵器とともに銀装圭頭大刀の優品が出土した。その他に吉見丘陵斜面には吉見百穴横穴墓群(50)をはじめ、黒岩

横穴墓群(25)、岩粉山横穴墓群が存在する。生産遺跡としては和名埴輪窯跡群(39)が知られ、周辺の古墳群へ埴輪を供給している。

奈良・平安時代の遺跡は、吉見町域では田甲原遺跡、西吉見条里遺跡等がある。西吉見条里遺跡では、軸方向を揃えた住居跡や掘立柱建物跡、大規模な井戸跡が検出され、条里制の施行に伴い低地へ進出した計画集落の可能性が指摘されている。さらに、西吉見条里遺跡の東側には大規模な古代道路跡(2)が発見され、大きな話題を呼んだ。7世紀末の建設から約200年間にわたり使用され、9世紀後半に廃絶したと考えられている。この道路跡の延長線上に位置する御所遺跡や天神前C遺跡でも、道路跡の側溝が検出されている。

平安時代末期から中世になると武蔵七党や在地武士団が台頭し、各地に館跡が造られるようになる。周辺には源範頼館跡(18)や大串次郎館跡がある。戦国期にはいと、本遺跡の北西約700mの丘陵上に築城された松山城跡(48)が、周辺地域を包括した拠点となる。

Ⅲ 遺跡の概要

西吉見条里遺跡は、平成12年度以降、県営ほ場整備事業西吉見南部地区及び県営灌漑排水事業横見地区に先立つ事前調査が吉見町教育委員会によって継続的に実施され、沖積低地における縄文時代から中・近世にいたる土地利用の変遷が明らかにされている（永井2002、太田2005）。同じく当事業団でも平成16年度に市野川河川改修事業に伴う事前調査で、吉見丘陵裾の自然堤防上に営まれた平安時代の集落跡を調査した（磯崎2005）。

今回の第23地点の調査は、諏訪堰の上流側にあたる市野川左岸堤防の改修工事に伴う事前調査である。平成16年度に実施した調査地点の約130m下流側に位置する。前回同様、調査区は市野川の堤防に沿った細長い調査区で、総延長約985mである。調査は、北西から南東方向に着手した順に、北から4区、3区、1区、2区と区分して実施した（第5図）。このうち3区の一部は、西吉見南部土地区画整理組合の事業地に該当する。

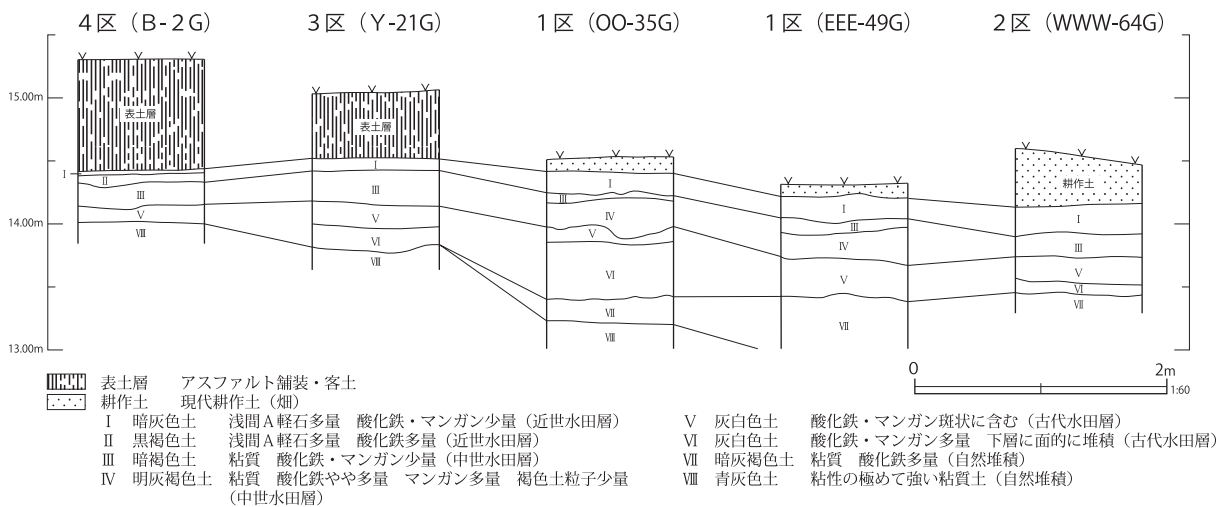
なお、東側隣接地部分（第24・25・26地点）については、吉見町教育委員会が西吉見南部土地区画整理事業の事前調査として調査を実施した。

第23地点の調査で検出された遺構は、溝跡12条、土壇3基、水田跡16区画、沼地・河川跡9箇所である。

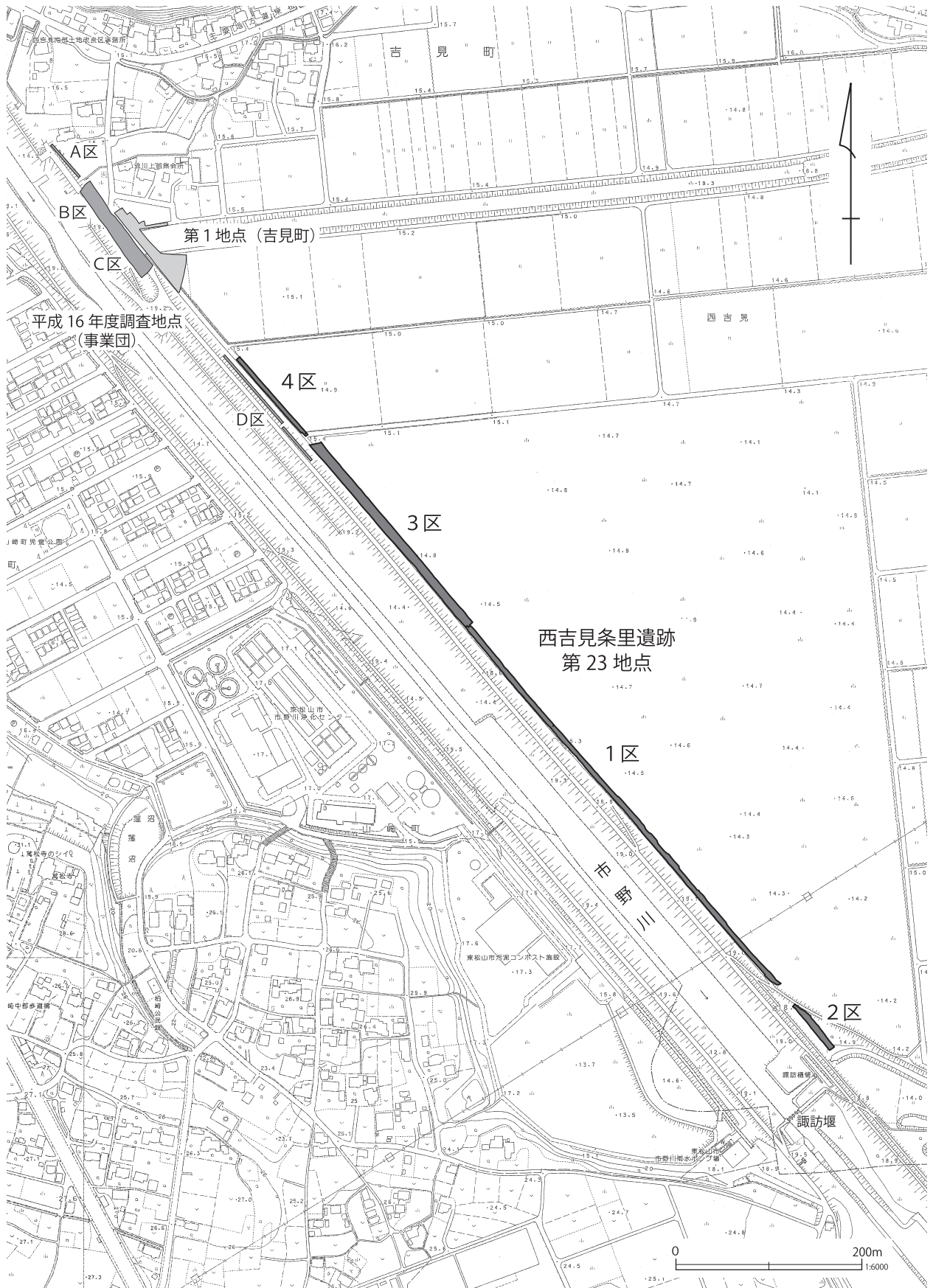
時代別による遺構の内訳は、古墳時代の溝跡4条、奈良・平安時代の溝跡7条、水田跡16区画、河川跡1箇所、中・近世の溝跡1条、土壇3基、時期不明の沼地・河川跡8箇所である。以下、時代を追って各遺構について説明する。

古墳時代の遺構は、1区と3区で溝跡4条が検出された。1区では南北方向に延びる第1号溝跡と、北東から南西方向に延びる第2号溝跡の2条が検出された。3区では北東から南西方向に延びる第6号溝跡と、約12mの距離を隔てて並走する第7号溝跡が検出された。

奈良・平安時代の遺構は、2～4区で溝跡が7条検出された。2区では北西から南東方向に延びる比較的規模の大きな第4号溝跡が1条検出された。3区では北東から南西方向に向かって調査区を横断する第5号溝跡が検出され、溝跡に沿うように北西側に堤状盛土遺構が構築されていた。その形状から条里水田に伴う大畦畔の可能性も考えられる。4区では水田跡との関連がうかがえる溝跡が5条検出された。北西端の第8・9号溝跡は水田畦畔に並行する南北溝で、用水路と考えられる。第10・11号溝跡は、調査区中央を東西方向に並走する。調査区南東側の第12号溝跡は、水田跡



第4図 基本土層



第5図 調査区位置図

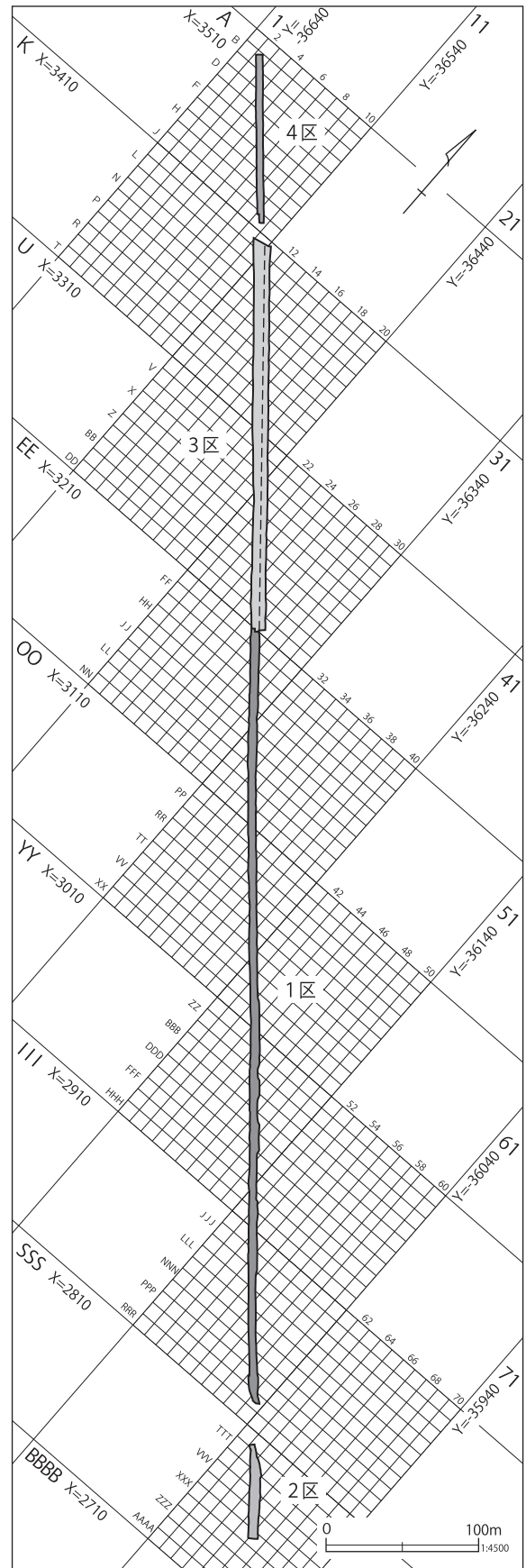
の南限を区切る東西溝で、溝の屈曲部に4本の杭列を構築していた。おそらく堰のように水量を調節するための施設の一部であろう。

水田跡は3区で7区画、4区で9区画の計16区画が検出された。3区では中央部から南東側にかけて周囲とは土質・色調の異なる帯状の変色帯の広がり確認され、水田畦畔と認定した。水田の区画は一辺約19.20mの方形に復元され、畦畔の軸線は正方位とは大きくずれる。遺物は3区水田跡1より7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる土師器北武蔵型坏が出土し、水田跡の形成時期の上限を考える上で重要な資料が得られた。

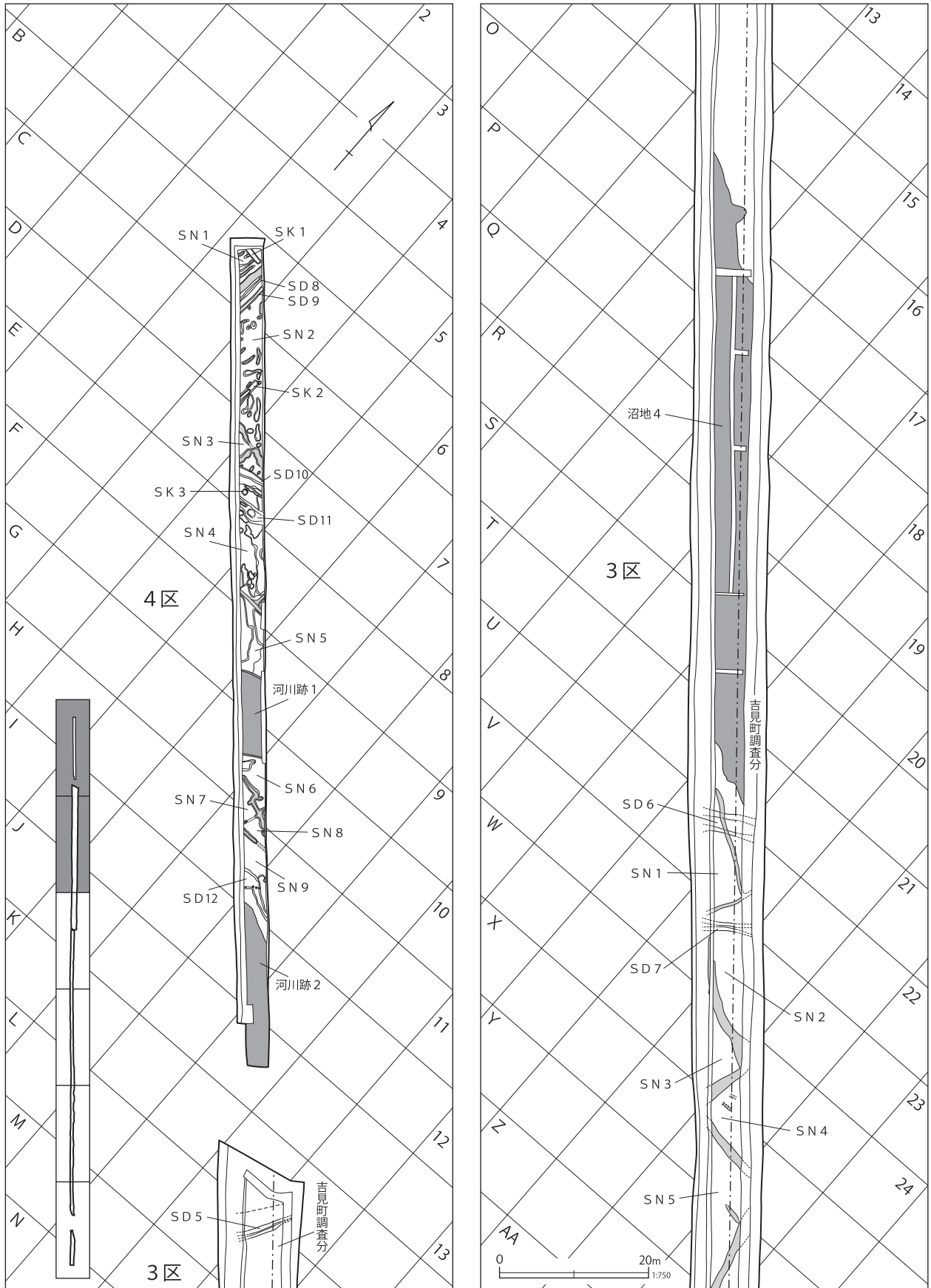
4区では調査区北西端から中央部の河川跡1を挟んで、調査区の南東端まで広範囲に水田跡が検出された。3区で検出された水田跡と同時期のものと考えられるが、両者を比較すると水田区画の大きさが3区に比べ一回り小さく、畦畔の軸線も異なる。さらに土層断面の観察の結果、畦畔盛土が二段に重なっている部分が認められ、上下二面の水田面が確認された。また、上面の水田面には不整形の落ち込みや盛り上がりが見られることも大きな特徴である。

中・近世の遺構は、2区を北西から南東方向に縦断する第3号溝跡が1条検出された。土壌は4区からまとめて3基が検出された。平面形は第1・2号土壌が長方形、第3号土壌が方形である。

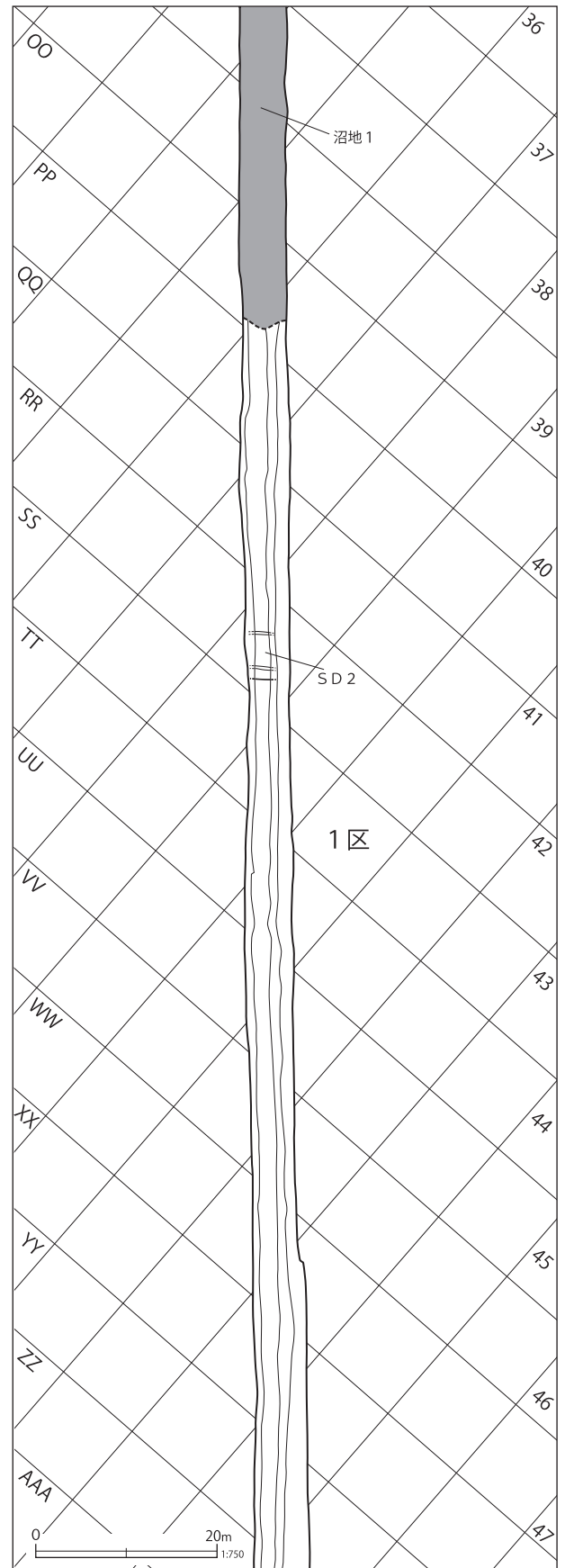
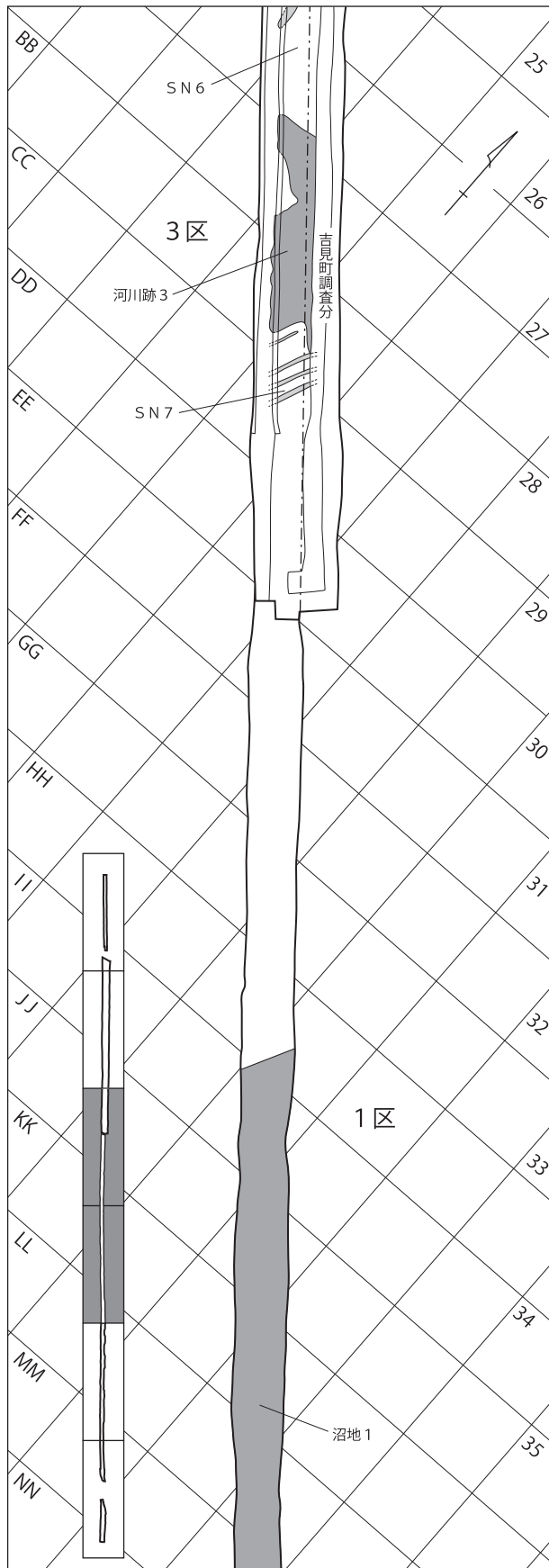
沼地・河川跡は2区を除く、1・3・4区で検出された。1区では大きく蛇行する旧河川の流路や沼地が5箇所検出された。3区では水田跡を浸食した河川跡が2箇所確認されているが、中世面まで堆積層が及んでいないことから、古代末期には埋没したものと考えられる。4区では2箇所に河川跡が検出された。このうちの河川跡1は埋土中に12世紀初頭に降下した浅間B軽石の堆積が確認され、9世紀後半を中心とする須恵器が出土していることから、奈良・平安時代の流路跡であることが判明した。



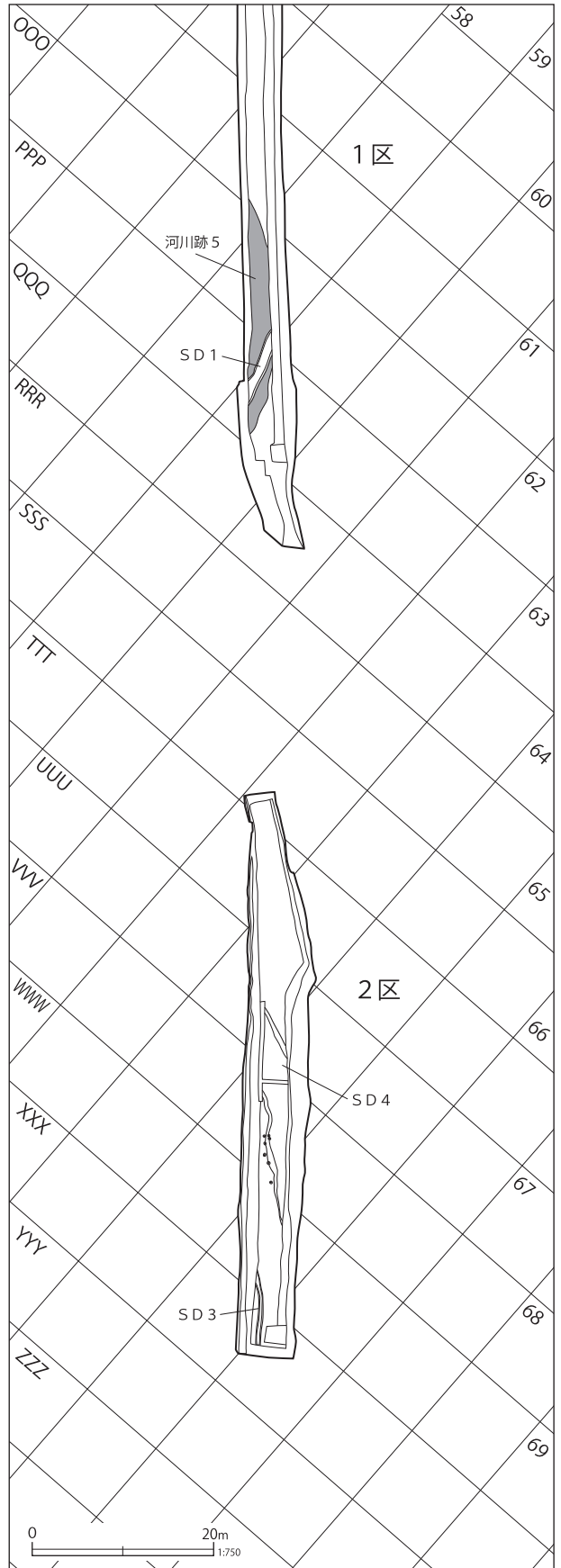
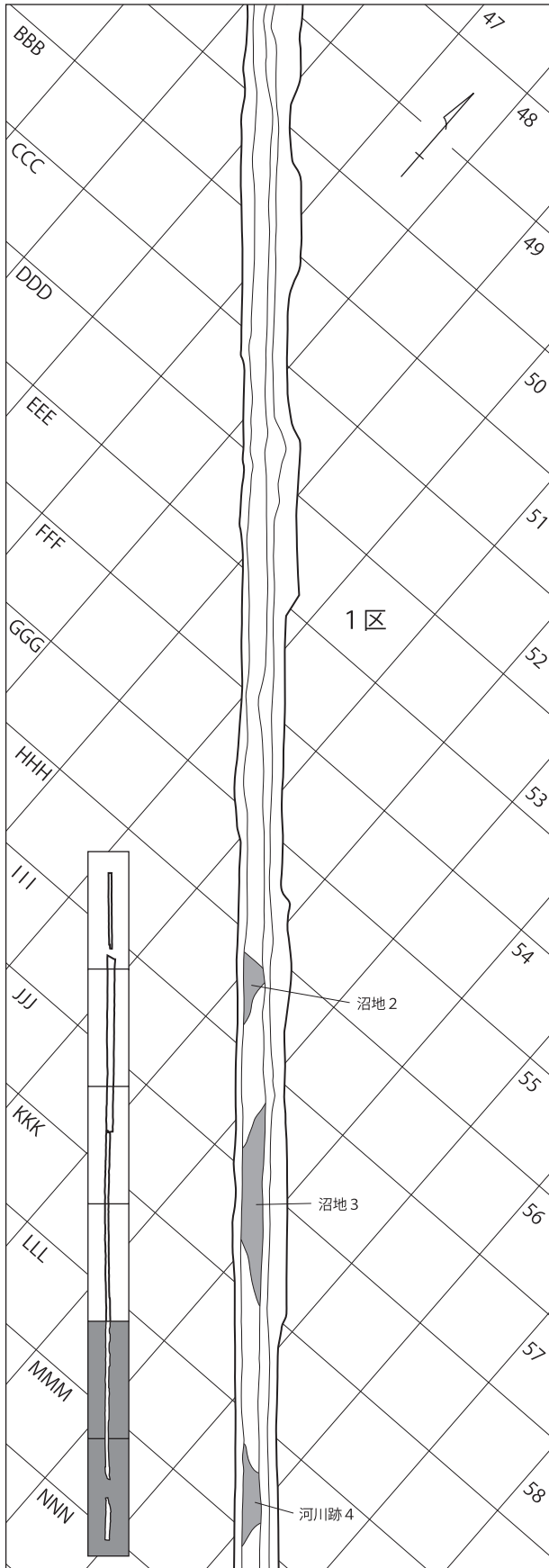
第6図 グリッド配置図



第7図 調査区全体図(1)



第8図 調査区全体図(2)



第9図 調査区全体図(3)

IV 遺構と遺物

1. 溝跡

第1号溝跡 (第10図)

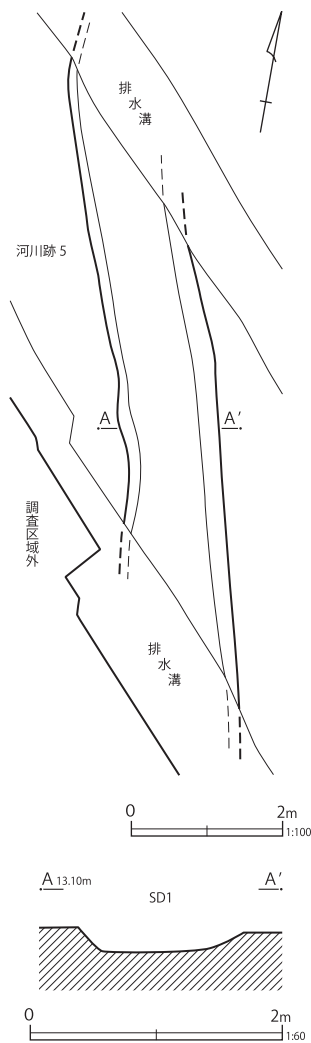
1区南東端の000・PPP-58、PPP-59グリッドに位置する。南北方向に走行する溝跡で、1区河川跡5の落ち込みを掘り込んでいた。確認面における規模は長さ6.55m、幅1.22~1.30m、深さ0.07~0.19mで、断面形は浅い逆台形である。走行方向はN-15°-Wを示す。

遺物がないため時期は特定できないが、埋土の状態から古墳時代と判断した。

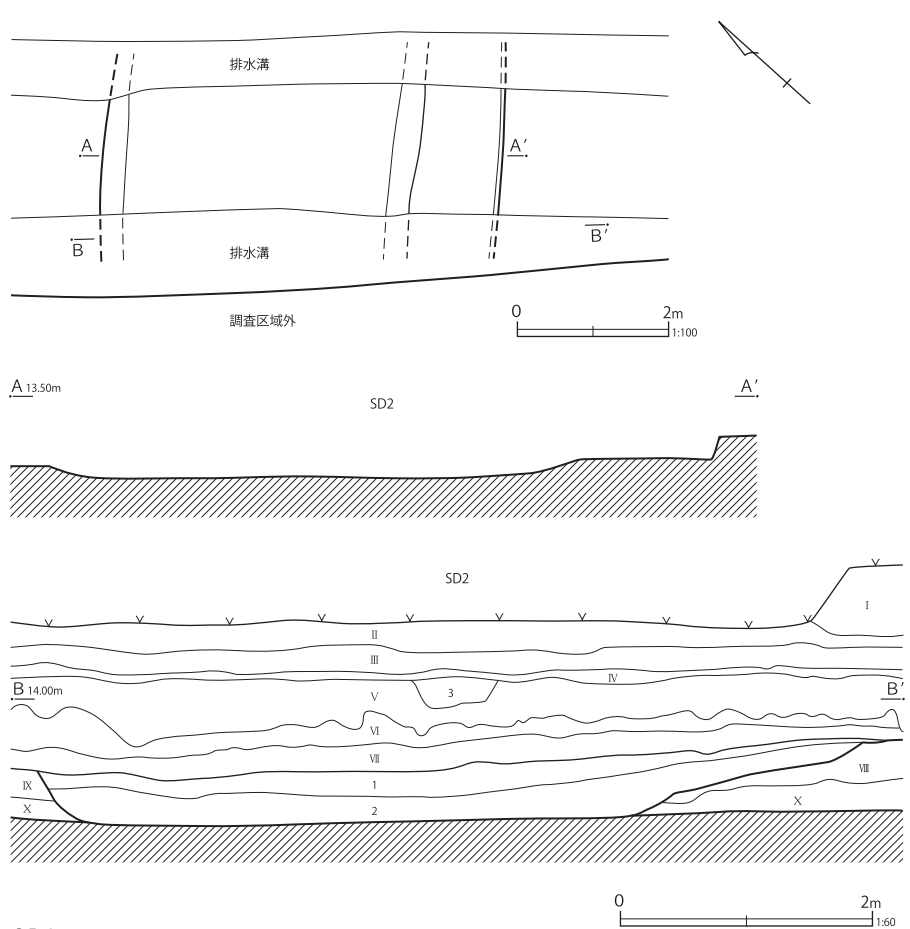
第2号溝跡 (第10図)

1区中央部やや北寄りのRR-38グリッドに位置する。北東から南西方向に伸びる溝跡で、片側にテラス状の段差を造り出す。確認面における規模は最大幅5.26m、一段深く掘り込んだ部分の幅

SD 1 (1区)



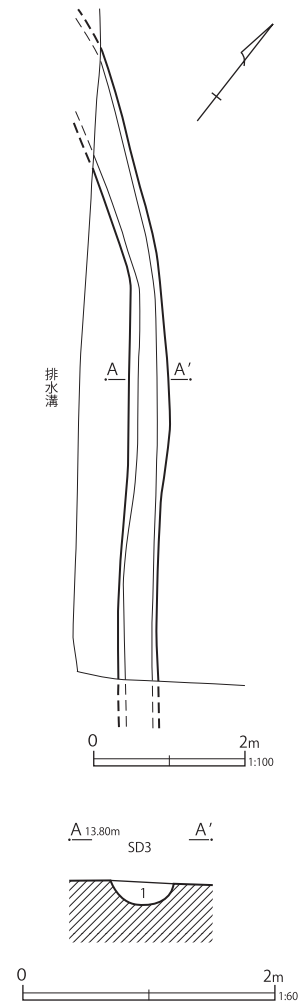
SD 2 (1区)



- SD 2
- I 褐色土 粘質 耕作土
 - II 明褐色土 酸化鉄多量 マンガン少量 浅間A軽石多量 しまり強い
 - III 褐色土 酸化鉄やや多量 マンガン少量 浅間A軽石多量 しまり強い
 - IV 暗褐色土 マンガン少量 しまり強い
 - V 暗灰褐色土 粘質 酸化鉄やや多量 マンガン多量 褐色土粒子少量 しまり強い
 - VI 明灰褐色土 粘質 酸化鉄・褐色土粒子多量
 - VII 明灰褐色土 粘質 酸化鉄少量
 - VIII 暗灰褐色土 褐色土粒子やや多量 粘性強い
 - IX 暗灰褐色土 酸化鉄やや多量 炭化物を層状に含む
 - X 明青灰褐色土 粘質 灰色土粒子多量 粘性強い
 - 1 明灰褐色土 粘質 酸化鉄微量
 - 2 暗灰褐色土 粘質 褐色土粒子少量
 - 3 暗灰褐色粘土 マンガン多量 (土壌埋土)

第10図 第1・2号溝跡

SD3 (2区)



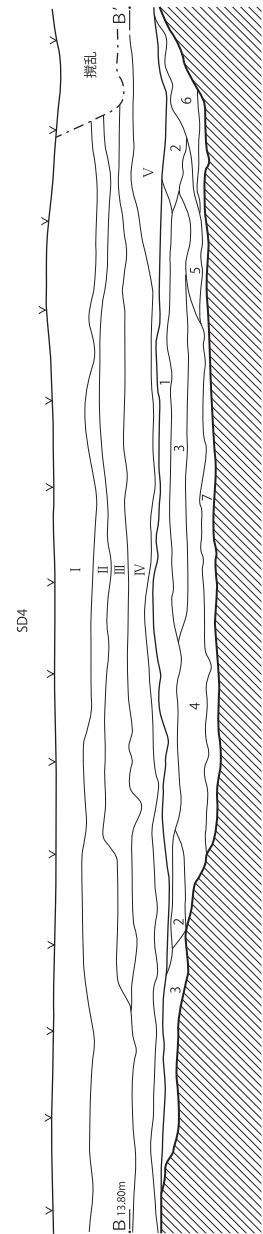
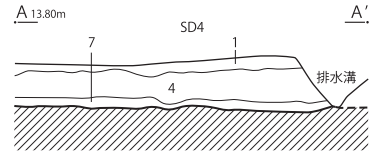
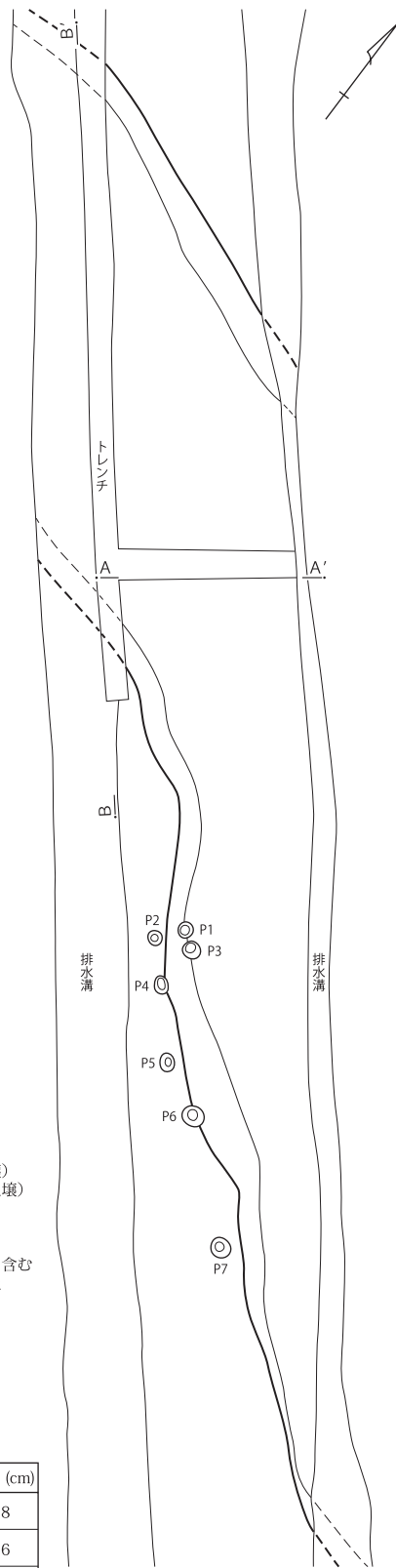
SD3
1 暗灰褐色土 粘質 炭化物少量 暗灰色粘土と明灰色粘土をブロック状に含む 底面に炭化物が帯状に堆積する

SD4
I 褐色土 粘質 耕作土
II 明褐色土 粘質 酸化鉄多量 (畑土壤)
III 灰褐色土 粘質 酸化鉄少量 粘性強い (水田土壤)
IV 暗灰褐色土 粘質 酸化鉄少量 しまり良好 (水田土壤)
V 黒褐色土 粘質 マンガン集積 (水田床土)
1 暗灰褐色土 粘質 酸化鉄多量 植物繊維少量
2 灰色土 粘質 暗灰色粘土を攪拌状に含む
3 灰褐色土 粘質 酸化鉄多量 暗灰色粘土を帯状に含む
4 黒褐色土 粘質 炭化物・植物繊維少量 砂泥質土
5 灰色土 粘質 酸化鉄少量
6 明灰色土 粘質 暗灰色粘土を攪拌状に含む
7 青灰色土 粘質 明灰色粘土をブロック状に含む

第2表 第4号溝跡ピット計測表

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)	ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)
P1	25	17	P5	30	18
P2	24	20	P6	34	16
P3	29	21	P7	34	30
P4	29	17			

SD4 (2区)

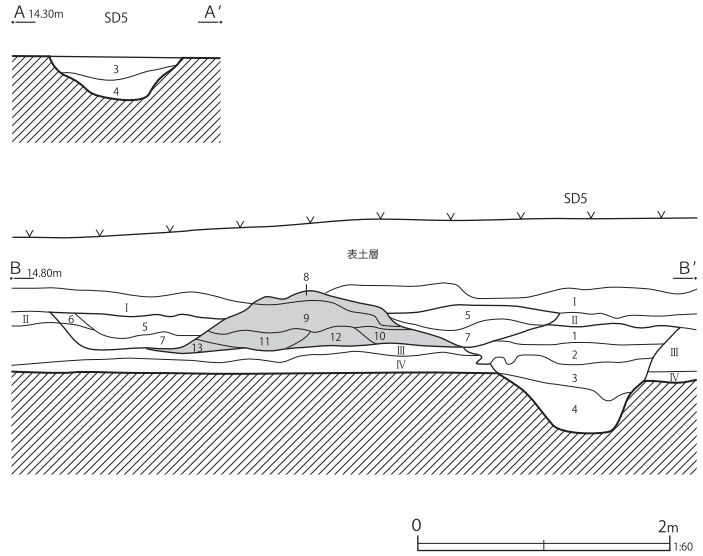
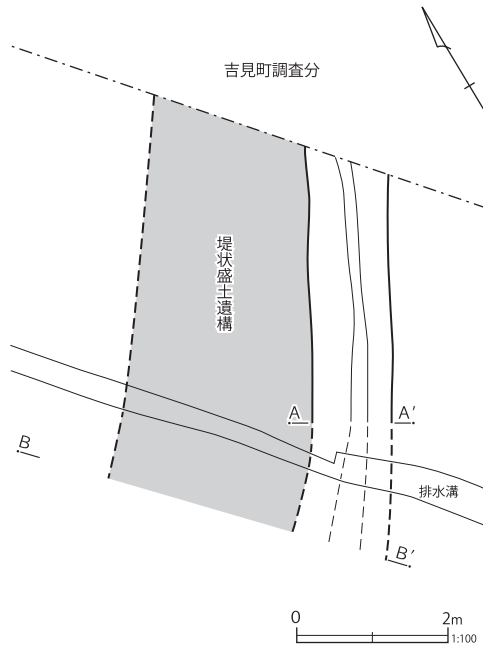


0 2m 1:120

0 2m 1:80

第11図 第3・4号溝跡

SD5 (3区)



- SD5
- | | |
|------------|--|
| I 灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン斑状に含む
しまりやや強い 粘性やや弱い (水田土壌) |
| II にぶい黄褐色土 | 酸化鉄・マンガン斑状に含む
しまりやや強い 粘性やや弱い (水田土壌) |
| III 黒褐色土 | 酸化鉄・マンガン斑状に含む
しまりやや強い 粘性やや弱い (水田土壌) |
| IV 灰白色土 | 酸化鉄・マンガン多量
しまりやや弱い 粘性弱い (洪水堆積層) |
- (SD5)
- | | |
|-----------|---------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い |
| 2 にぶい黄褐色土 | 酸化鉄・マンガン少量 しまり弱い 粘性強い |
| 3 暗灰色土 | 白色粘土ブロック・マンガン少量 しまり中 粘性強い |
| 4 青灰色土 | 暗灰色土・灰白色土ブロック多量 マンガン少量 |

- (溝跡)
- | | |
|---------------------|--|
| 5 暗褐色土 | 黒褐色土・酸化鉄・マンガン微量
しまりやや強い 粘性やや弱い |
| 6 暗褐色土 | 酸化鉄・マンガン少量 しまりやや弱い 粘性やや強い |
| 7 暗灰褐色土
(堤状盛土遺構) | 酸化鉄・マンガン少量 しまり弱い 粘性強い |
| 8 黒褐色土 | 黒褐色土主体 酸化鉄微量 しまり強い 粘性弱い |
| 9 暗灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン多量 灰白色土ブロック少量
しまりやや強い 粘性やや弱い |
| 10 暗灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン多量 しまりやや弱い 粘性やや強い |
| 11 灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン斑状に含む 灰白色土ブロック多量
しまりやや弱い 粘性やや強い |
| 12 暗灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン斑状に含む 灰白色土ブロック少量
しまりやや弱い 粘性やや強い |
| 13 灰褐色土 | 酸化鉄・マンガン少量 しまりやや弱い 粘性やや強い |

第12図 第5号溝跡

4.17m、深さ0.08~0.19mである。埋土は自然堆積を示す。

遺物がなく、時期は特定できないが、古代水田層に対応するⅦ層の下に掘り込み面をもつことから古墳時代と判断した。

第3号溝跡 (第11図)

2区南東端のWWW・XXX-65、XXX-66グリッドに位置し、北西から南東方向に向かって緩やかに屈曲する。確認面における規模は長さ7.75m、幅0.38~0.53m、深さ0.11~0.17mである。埋土は暗灰色粘土と明灰色粘土をブロック状に含む暗灰褐色土の単一層である。人為的な埋戻しと考えられ、底面に炭化物が薄く堆積していた。

遺物がないため、時期は特定することが難しいが、埋土の状態から中・近世と判断した。

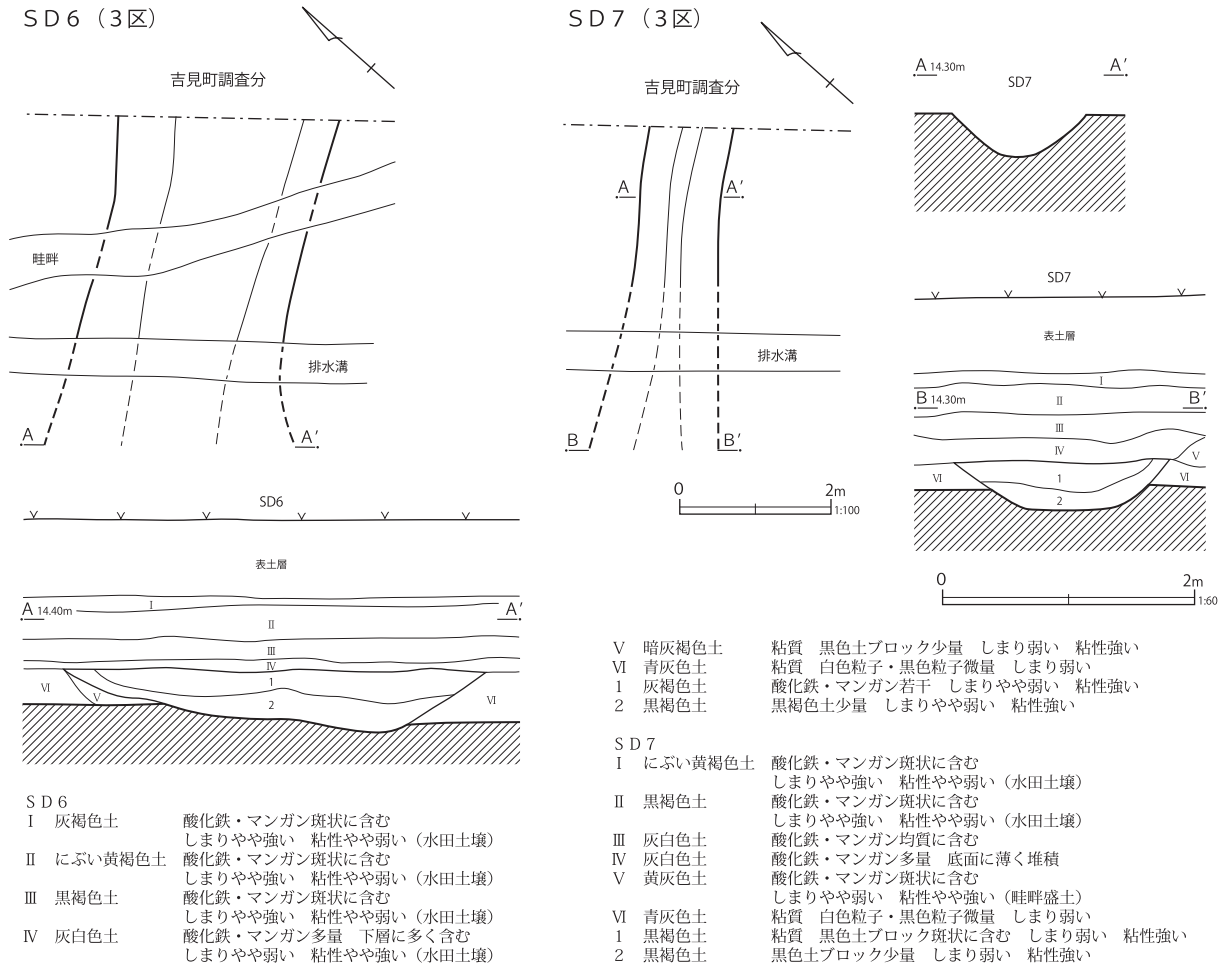
第4号溝跡 (第11図)

2区中央部のUUU-63・64、VVV-64・65、WWW-65グリッドに位置し、北西から南東方向に向かって、調査区を縦断する。確認面における規模は長さ17.90m、幅1.30~2.70m、深さ0.12~0.37mである。走行方向はN-43°-Wを示す。

埋土中に炭化物や植物繊維が含まれており、一時的に滞水状態にあったと推定される。

南西側壁面の周囲から7基のピットがまとめて検出された。配列に規則性はないが、ピット2・4・7の土層断面に柱痕跡があり、柱穴であることが判明した。溝跡に伴う柱穴列と考えられる。

時期は特定できないが、中世水田層に対応するⅣ・Ⅴ層の下から掘り込んでいることから、奈良・平安時代と判断した。



第13図 第6・7号溝跡

第5号溝跡 (第12図)

3区北西端のK・L-11グリッドに位置し、北東から南西方向に向かって調査区を横断する。確認面における規模は幅0.75~1.08m、深さ0.30~0.35mである。走行方向はN-28°-Eを示す。

調査時、平面では確認はできなかったが、調査区壁面に第5号溝跡に接する堤状盛土遺構が確認された。堤幅は2.45m、高さは0.45mで、溝跡に沿うように延びている。堤状盛土遺構の土層は、暗灰褐色土と灰褐色土をブロック状に盛り上げ、盛土上面が硬くしまっていることから、大畦畔として機能していたものと考えられる。

時期は特定できないが、中世水田層に対応するII層の下から掘り込んでいることから、奈良・平安時代と判断した。

第6号溝跡 (第13図)

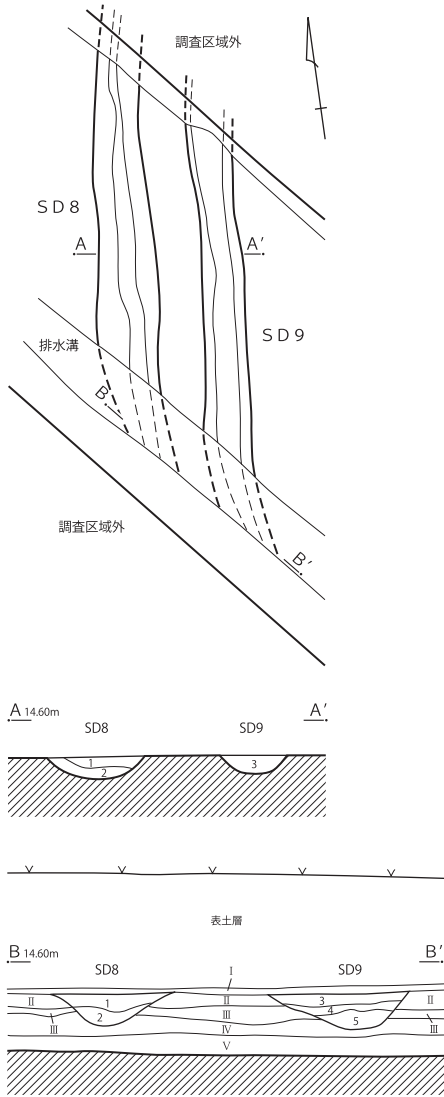
3区中央のT・U-18グリッドに位置する。北東から南西方向に走行する溝跡で、古代の水田面下層から検出された。確認面における規模は幅2.72~2.93m、深さ0.26~0.40mである。断面形は底面の平坦な逆台形で、走行方向はN-61°-Eを示す。

時期は、層位や埋土の状態から古墳時代と判断した。

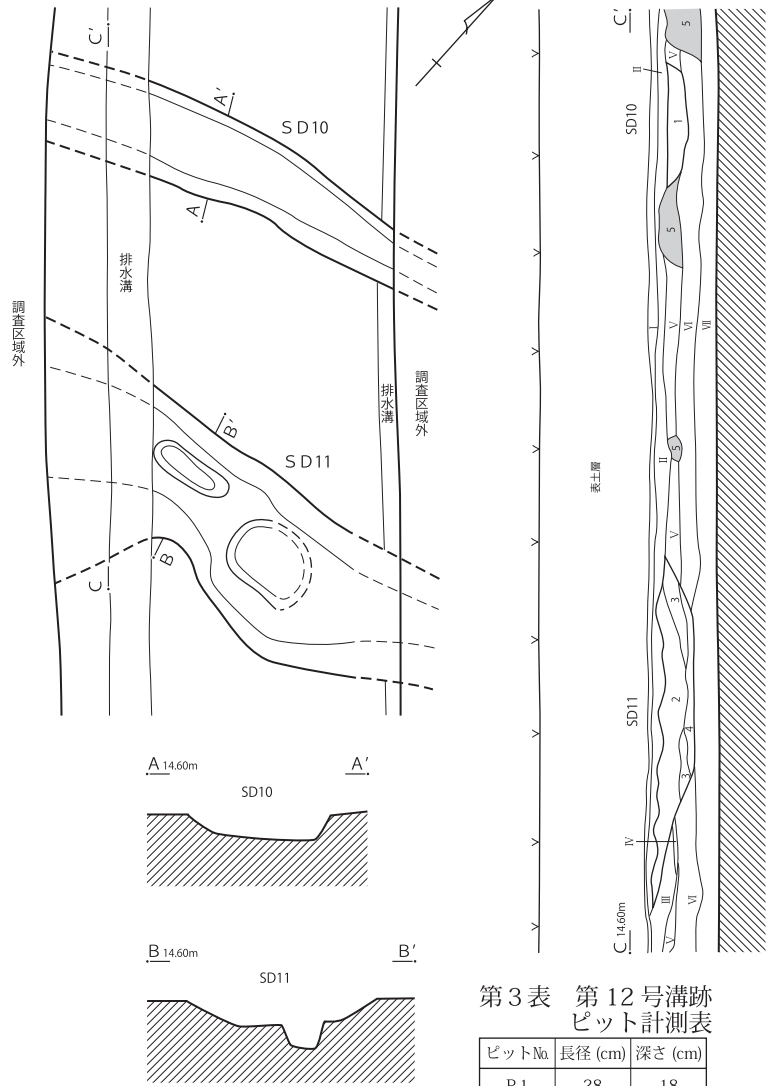
第7号溝跡 (第13図)

3区中央のV-19グリッドに位置し、北西方向に約12m隔てて第6号溝跡が並走する。第6号溝跡と同じく古代水田面の下層から検出された。確認面における規模は幅1.05~1.13m、深さ0.30~0.36mである。断面形は逆台形で、走行方向はN

SD8・9 (4区)



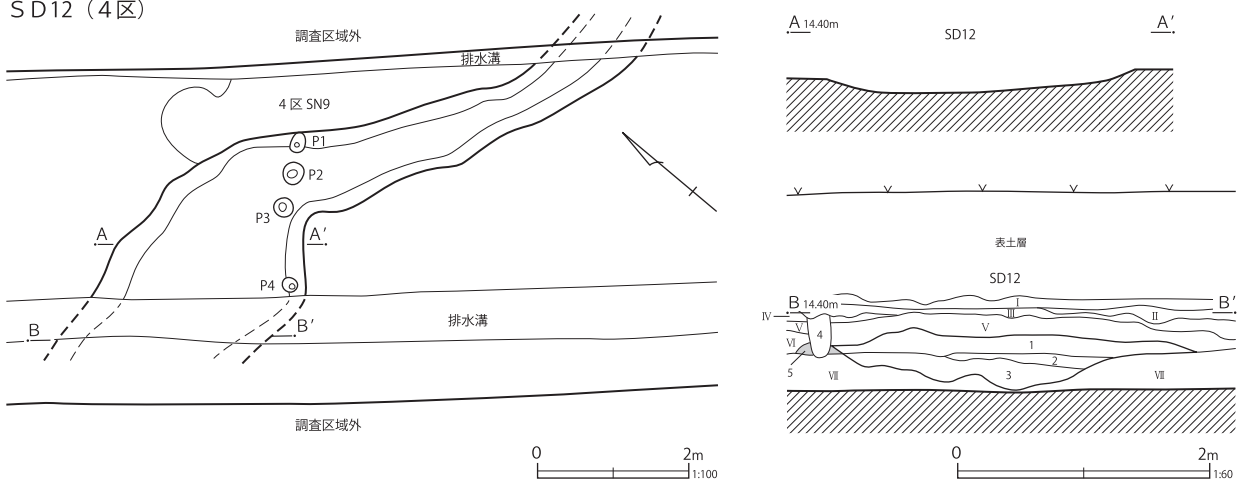
SD10・11 (4区)



第3表 第12号溝跡
ピット計測表

ピットNo	長径 (cm)	深さ (cm)
P1	28	18
P2	28	10
P3	25	20
P4	20	17

SD12 (4区)



第14図 第8～12号溝跡(1)

SD8・9	
I 暗灰色土	酸化鉄・マンガン・白色粒子少量
II 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む
III 灰白色土	酸化鉄・マンガン多量
IV 灰白色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む
V 青灰色土	
1 暗褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
2 暗青灰色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
3 暗褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む 白色粒子(φ1~2mm)少量 しまりやや強い 粘性やや弱い
4 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
5 暗青灰色土	酸化鉄・マンガン・灰白色土ブロック少量 しまりやや強い 粘性やや弱い
SD10・11	
I 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量 しまり強い 粘性やや弱い
II 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量 白色粒子(φ1~2mm)斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
III 灰白色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや弱い 粘性やや強い (畦畔盛土の崩落土か)
IV 灰白色土	酸化鉄・マンガン少量斑状に含む しまりやや弱い 粘性やや強い (畦畔盛土の崩落土か)
V 暗褐色土	酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや弱い (水田土壌)
VI 灰白色土	酸化鉄・マンガンが上面に堆積 畦畔の形成に伴い攪拌されている しまりやや弱い 粘性やや強い
VII 灰白色土	酸化鉄・マンガン多量 しまりやや弱い 粘性強い(自然堆積層)

1 暗褐色土	酸化鉄・マンガン・白色粒子(φ1~2mm)を斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
2 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン・灰白色土ブロック斑状に含む しまりやや弱い 粘性やや強い
3 暗褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
4 暗褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや弱い 粘性やや強い
5 灰白色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや強い (VI層由来の畦畔盛土)
SD12	
I 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い
II 暗灰色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや強い
III 黒褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む 白色粒子(浅間A軽石)少量 しまりやや強い 粘性やや弱い
IV 灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや強い
V 灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性やや弱い
VI 灰白色土	酸化鉄・マンガン下層に多く含む しまりやや強い 粘性やや弱い
VII 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層に均質に含む しまりやや強い 粘性強い
1 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い
2 灰白色土	酸化鉄・マンガン少量 しまりやや強い 粘性やや強い
3 青灰色土	酸化鉄・マンガン少量 しまりやや弱い 粘性強い
4 灰白色土	酸化鉄・マンガン少量 しまりやや弱い 粘性やや強い (ピット埋土)
5 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや弱い 粘性やや強い (畦畔盛土)

第15図 第8～12号溝跡(2)

—54° —Eを示す。埋土は自然堆積である。

時期は、層位や埋土の状態から古墳時代と判断した。

第8・9号溝跡(第14・15図)

4区北西端のB・C—2グリッドに位置する。約0.5mの間隔をおいて2条が並走する南北溝である。第8号溝跡の規模は、幅0.56~0.82m、深さ0.16~0.26mである。第9号溝跡の規模は、幅0.46~0.62m、深さ0.11~0.17mである。両者は同一方位を指向し、N—4° —Eを示す。

この2条の溝跡は、隣接する4区水田跡1の畦畔と同一方位を指向することから、水田に伴う水路の可能性が高い。

埋土の状態や調査区壁面の土層断面から、時期は奈良・平安時代と判断した。

第10号溝跡(第14・15図)

4区中央部のD—4グリッドに位置する。南東側約2.5mに第11号溝跡が並走する。第11号溝跡とともに4区に広がる水田跡を東西に貫流する。確認面における規模は幅0.77~1.20m、深さ0.14~0.21mである。断面形は逆台形で、走行方向はN—79° —Eを示す。

時期は中世水田層に対応するII層の下から掘り

込まれ、畦畔盛土(5層)との関連性がうかがわれることから、奈良・平安時代と判断した。

第11号溝跡(第14・15図)

4区中央部のD・E—4グリッドに位置し、第10号溝跡と並走する。確認面における規模は幅1.43~2.00m、深さ0.16~0.37mである。溝幅は一定せず、蛇行する。底面には土塊状の落ち込みをもち、凹凸が顕著である。

時期は特定できないが、中世水田層に対応するII層の下から掘り込んでいることから、奈良・平安時代と判断した。

第12号溝跡(第14・15図)

4区南東側のH—7・8グリッドに位置する。4区水田跡の南限を画するように東西方向に走行する。南壁に屈曲部を造り出し、溝に直交するように4基のピットを配する。ピット列は溝幅を大きく減じる屈曲部に列状に穿たれていることから、水量を調節するため堰状の施設を構築した杭列の可能性ある。確認面における規模は長さ5.95m、幅0.65~2.80m、深さ0.07~0.16mである。

時期は中世水田層に対応するV層の下から掘り込まれていることから、奈良・平安時代と判断した。

2. 土壇

土壇は4区から3基検出された。遺物がほとんど出土していないため、時期を特定することが難しく、形態や埋土の状態から中・近世と判断した。

第1号土壇 (第16図)

4区北西端のB-2グリッドに位置し、西側は調査区域外に延びる。平面形は長方形で、断面形は浅い皿形である。規模は長軸長2.55m、短軸長0.74m、深さ0.08mである。長軸方向はN-80°-Wを示す。

遺物は出土していないが、埋土に浅間A軽石を含むことから近世後半以降に位置づけられる。

第2号土壇 (第16図)

4区北西側のC-3グリッドに位置し、南側は

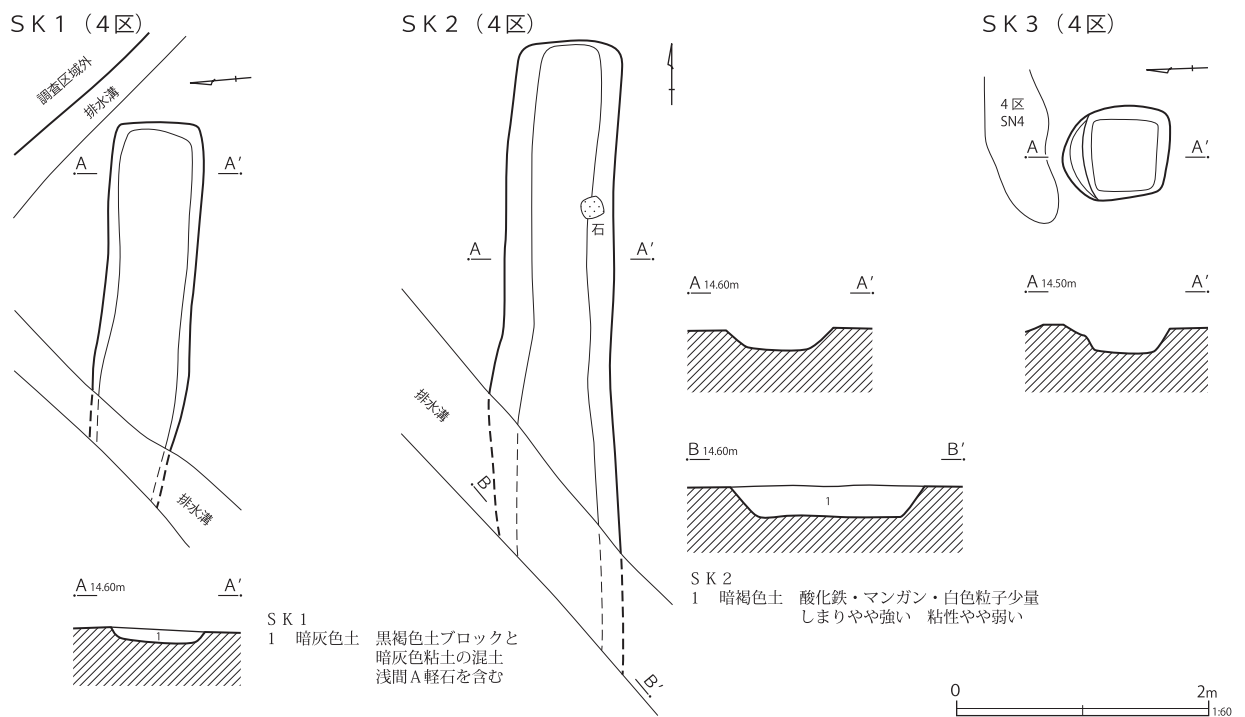
調査区域外に延びる。平面形は長方形で、断面形は逆台形である。規模は長軸長3.78m、短軸長0.85m、深さ0.17mである。長軸方向はN-2°-Eを示す。

東壁際の底面に拳大の円礫が置かれていた。埋土中から土師器片と桃核1点が出土したが、時期を特定することはできなかった。

第3号土壇 (第16図)

4区北西側のD-4グリッドに位置する。平面形は方形で、北壁上部に小さなスロープを造り出す。断面形は逆台形である。規模は長軸長0.83m、短軸長0.72m、深さ0.19mである。

埋土の状態から近世以降と考えられる。



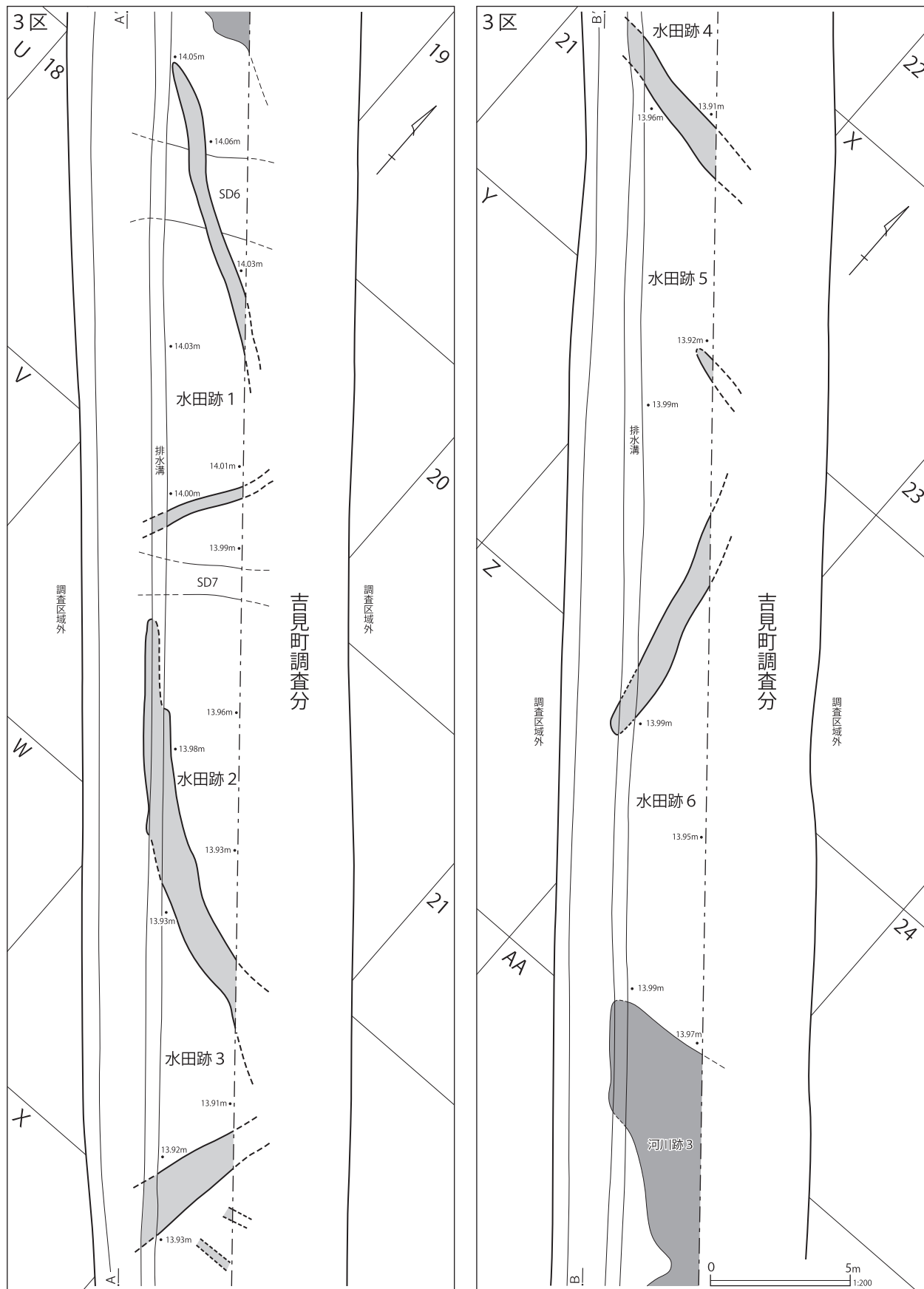
第16図 土壇

3. 水田跡

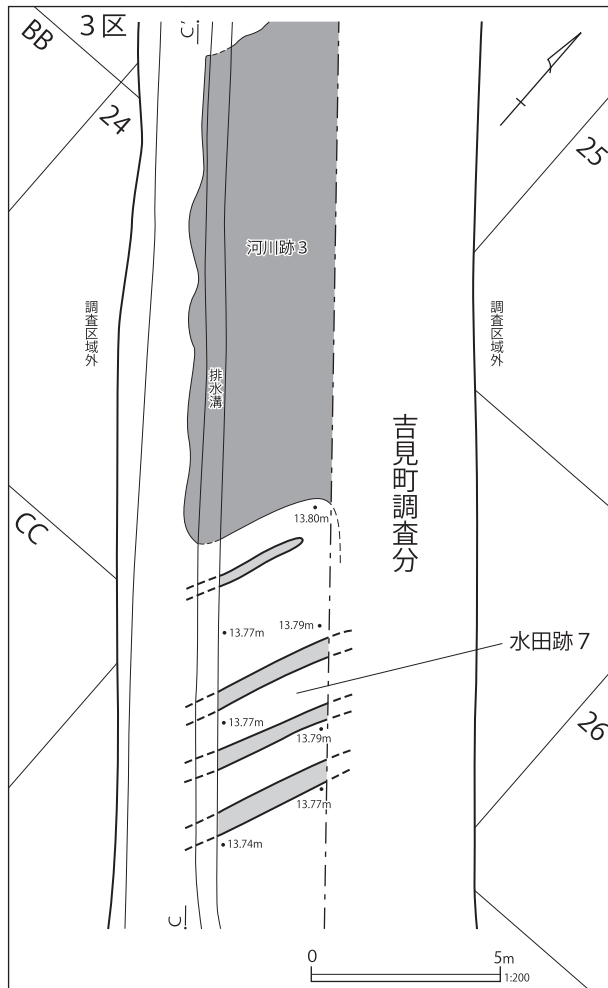
水田跡は、調査区の中央部から北西部にあたる長さ約360mの範囲で検出された。3区沼地4を挟んで、南東側に3区水田跡、北西側に4区水田跡が広がっていた。調査区が細長いため、水田跡

の全容を把握することは難しいが、水田畦畔が連続して確認されることから、3区で7区画、4区で9区画、計16区画が検出された。

水田跡は、土質や色調の異なる帯状の変色帯が



第17図 3区水田跡(1)



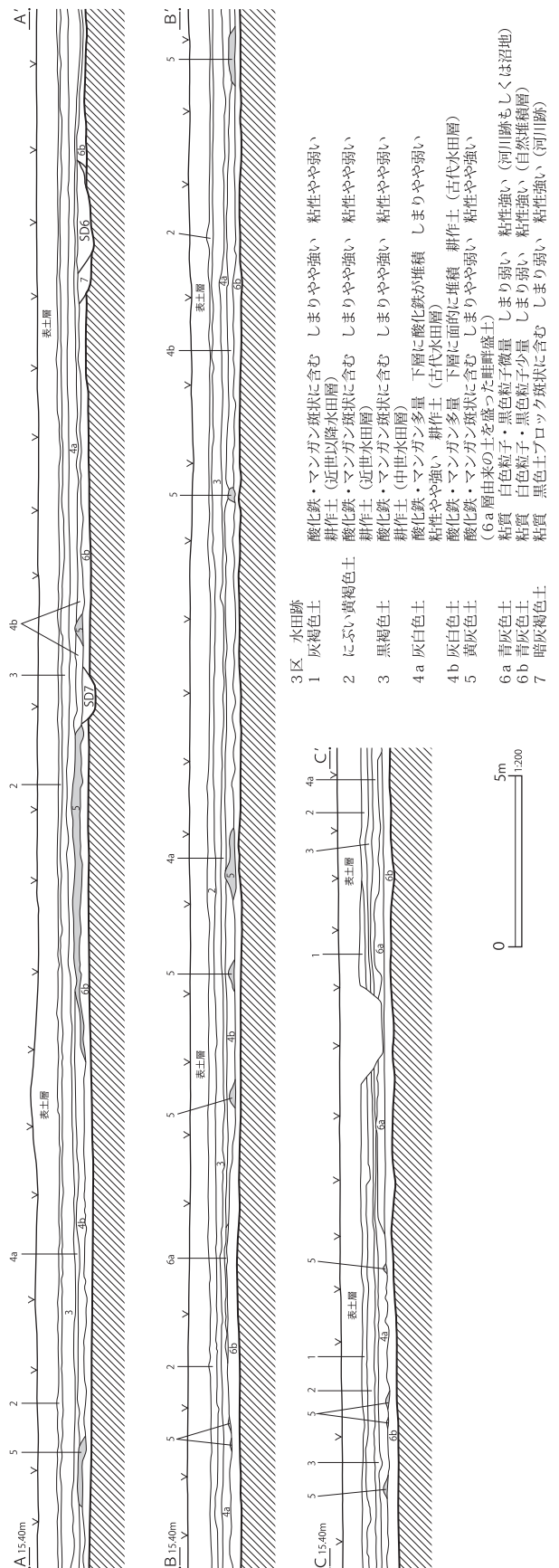
第18図 3区水田跡(2)

検出された範囲を畦畔と認識した。当遺跡は丘陵部から低地部に流れ出す市野川の形成した扇状地に立地している。そのため水田面の標高を見ると、北西から南東に向かって緩やかに傾斜していることから、水はこの方向に流れたと考えられる。水田跡の時期は、土層断面の観察や出土遺物などから奈良・平安時代と判断した。

3区水田跡 (第17~19図)

3区の中央部から南東部のT-18~CC-25グリッドにかけて位置し、長さは約110mに及んでいる。3区水田跡1~6までは水田畦畔が連続しているものの、3区水田跡6と3区水田跡7の間は3区河川跡3によって削平され、畦畔の一部が途切れていた。

水田面の標高は北西端で14.05m、南東端で



第19図 3区水田跡(3)

13.77mである。畦畔の規模は幅0.95～1.58m、水田面からの高さは0.10～0.20mである。畦畔盛土は6b層の青灰色土に由来する土を盛り上げた黄灰色土（5層）を主体とする。3区水田跡1～3の畦畔を基準に水田区画を復元すると一辺約22.40m、方向はN-31°-Eとなる。

3区水田跡1出土遺物（第20図1）

遺物は全体に少ないが、3区水田跡1の水田面にあたる4b層上面の灰褐色土層から土師器杯の破片が出土した。1は口縁部が短く内屈する丸底形態の北武蔵型杯で、体部外面にヘラケズリを施す。時期は7世紀末から8世紀初頭に位置づけられ、水田跡の形成時期の上限を示すものであろう。

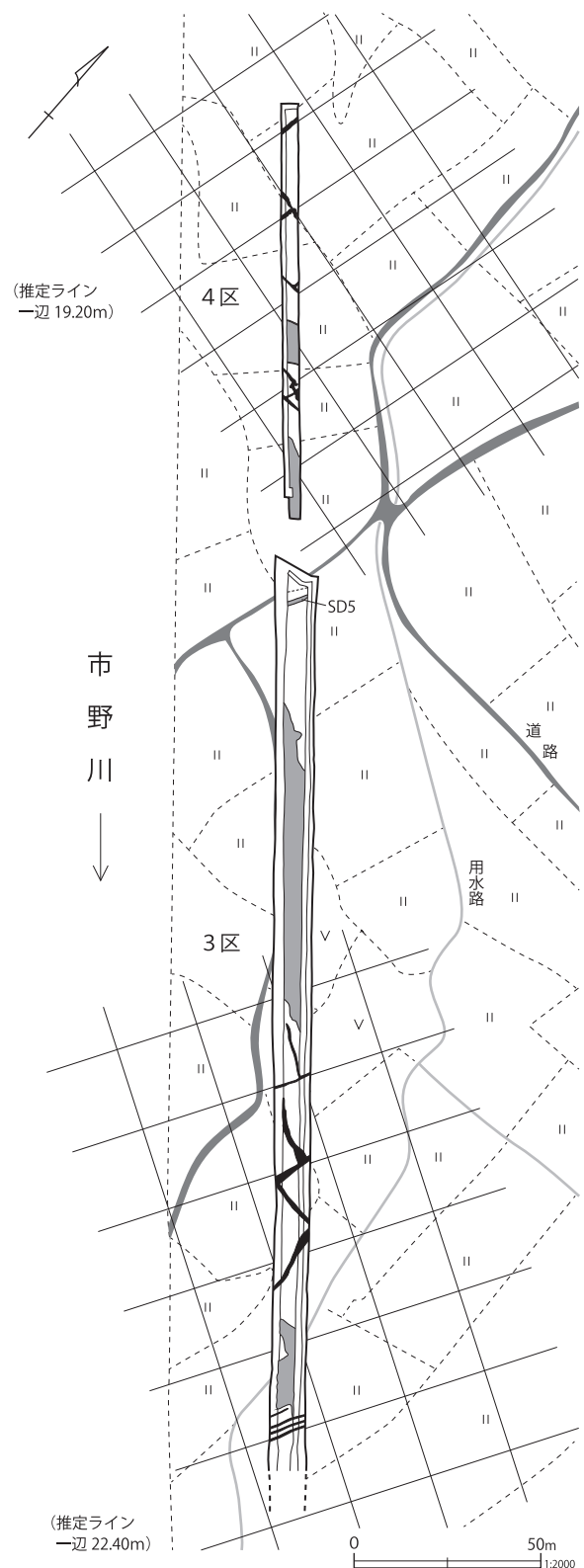
4区水田跡（第22～24図）

4区の北西端から4区河川跡1を挟む中央部のB-2～H-8グリッドに位置し、長さは約90mに及んでいる。畦畔の規模は幅0.60～1.00m、水田面からの高さは0.15m前後で、断片的に残る。調査区壁面の土層観察の結果、畦畔盛土の重なりから、上下二面の水田面があることが判明した。耕作土は上面が灰褐色土、下面が灰白色土である。3区水田跡とは異なり、上面の水田面には不整形の落ち込みや畦畔盛土の痕跡と考えられる盛り上がり随所に認められた。水田面の標高は北西端で14.20m、南東端で14.00mである。

遺物は上面の水田面から平安時代の須恵器杯の破片が出土したのみである。4区水田跡1～4の畦畔を基準に水田区画を復元すると一辺約19.20m、方向はN-15°-Eとなる。



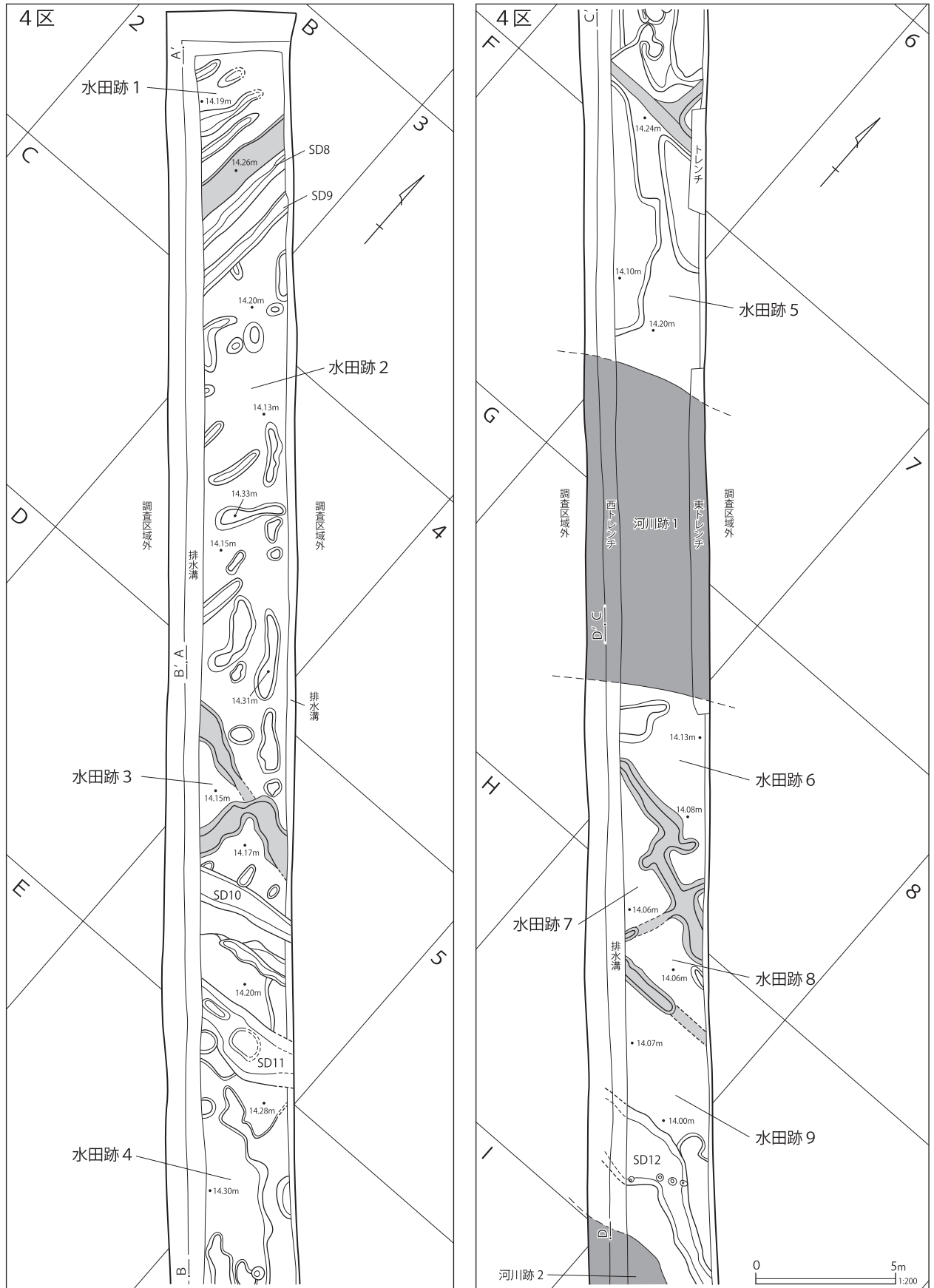
第20図 3区水田跡1出土遺物



第21図 3・4区水田跡全体図

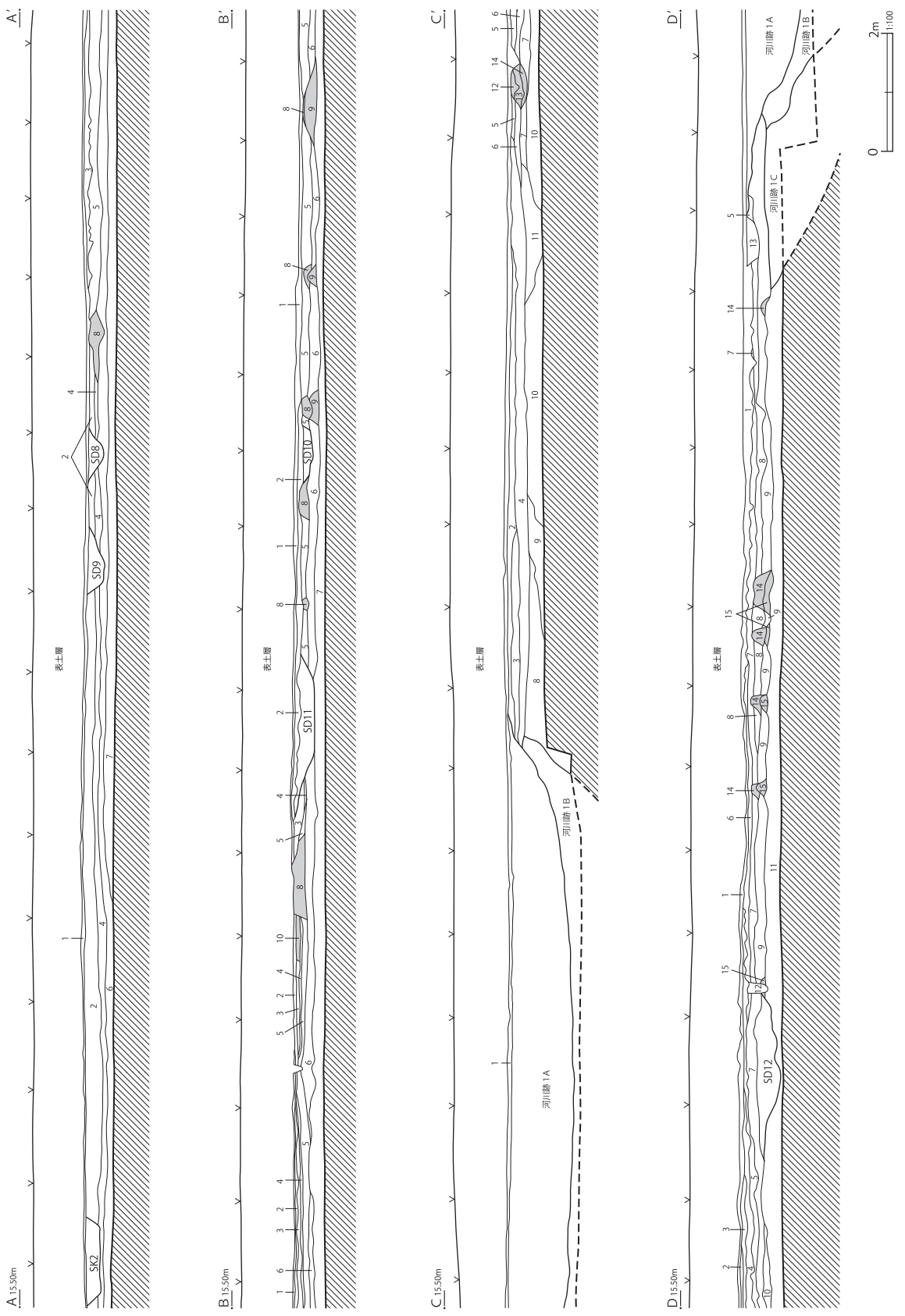
第4表 3区水田跡1出土遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	杯	(11.4)	[3.2]	-	CHIK	30	普通	橙	内屈口縁杯 U-18・19G トレンチ	8-1



第22図 4区水田跡(1)

4区



第23図 4区水田跡(2)

4区水田跡

(A-A´)

1 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量	斑状に含む	しまり強い	粘性やや弱い
2 暗褐色土	酸化鉄・マンガン多量	(水田層)	しまりやや強い	粘性やや弱い
3 黒褐色土	白色粒子少量		しまりやや強い	粘性やや強い
4 灰白色土	上層に酸化鉄・マンガン	攪拌状に堆積		
			しまりやや弱い	粘性やや強い
5 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量	(下層に多い)		
			しまりやや強い	粘性やや強い
6 灰白色土	上層に酸化鉄・マンガン	堆積	しまりやや弱い	粘性強い
		(自然堆積層)		
7 青灰色土	粘質	しまり弱い		粘性強い
8 灰白色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		

(B-B´)

1 灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量		しまり強い	粘性やや弱い
2 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量	斑状に含む	しまり強い	粘性やや弱い
3 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量		しまりやや強い	粘性やや弱い
4 暗黄褐色土	酸化鉄・マンガン均一	に堆積	しまりやや強い	粘性やや弱い
5 暗褐色土	酸化鉄・マンガン多量	(水田層)	しまりやや強い	粘性やや弱い
6 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層	に堆積	しまりやや弱い	粘性やや強い
		(水田層)		
7 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層	に堆積	しまりやや弱い	粘性強い
		(自然堆積層)		
8 灰白色土	酸化鉄・マンガン斑状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		
9 灰白色土	酸化鉄・マンガンやや多量		しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		
10 青灰色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや弱い
		(畦畔盛土の崩落土)		

(C-C´)

1 灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量		しまり強い	粘性やや弱い
2 暗灰褐色土	酸化鉄少量	マンガン多量	(水田層)	
3 灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状	に含む	(水田層)	
4 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量	(水田層)		
5 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量	しまりやや強い	(水田層)	
6 青灰褐色土	酸化鉄・マンガン上層	に均一に含む	しまりやや弱い	粘性やや強い
		(水田層)		

7 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層	に含む	しまりやや弱い	粘性やや強い
8 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層	に斑状に含む		
9 暗灰褐色土	河川堆積物			
10 灰白色土	酸化鉄・マンガン上層	に含む	しまりやや弱い	粘性強い
		(自然堆積層)		
11 暗褐色土	酸化鉄・マンガン・灰白色土	ブロック斑状に含む	しまりやや弱い	粘性やや強い
		(溝跡埋土)		
12 灰褐色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		
13 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		
14 灰白色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		

(D-D´)

1 灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量		しまり強い	粘性やや弱い
2 暗青灰色土	酸化鉄・マンガン・白色粒子	斑状に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
3 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
4 暗灰色土	酸化鉄・マンガン斑状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
5 黒褐色土	酸化鉄・マンガン・浅間A	軽石粒子少量	しまりやや強い	粘性やや弱い
6 灰褐色土	酸化鉄・マンガン少量	炭化物粒子微量	しまりやや強い	粘性やや弱い
7 灰褐色土	酸化鉄・マンガン斑状	に含む	しまりやや強い	粘性やや弱い
8 灰褐色土	酸化鉄・マンガン多量	含む	しまりやや強い	(水田層)
9 灰白色土	酸化鉄・マンガン下層	に多く含む	しまりやや強い	粘性やや弱い
		(水田層)		
10 青灰色土	酸化鉄・マンガンほとんど	含まない	しまりやや弱い	粘性強い
			酸化鉄・マンガン上層	に均質に含む
11 灰白色土			しまりやや弱い	粘性強い
12 灰白色土	酸化鉄・マンガン少量		しまりやや弱い	粘性やや強い
			(ビット埋土)	
13 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン上層	に均質に含む	しまりやや弱い	粘性強い
		(溝跡埋土)		
14 灰褐色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや強い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		
15 暗灰褐色土	酸化鉄・マンガン攪拌状	に含む	しまりやや弱い	粘性やや強い
		(畦畔盛土)		

第24図 4区水田跡(3)

4. 沼地・河川跡

沼地・河川跡は、1・3・4区において9箇所検出した(第7～9図)。調査は平面形の確認及びトレンチ調査による土層断面の観察に主眼を置いた。埋土中における植物繊維の混入など、後背湿地における滞水状態を反映したものを沼地と判断した。他方、河川跡は流水状態を示す砂礫質の土砂の堆積状況を判断材料としたが、判別に苦慮するものが多かった。遺物がなく大半のものは時期不明であるが、4区河川跡1は埋土中に浅間B軽石が堆積し、平安時代を中心とする須恵器、土師器、木製品、桃核等を出土したことから、奈良・平安時代の河川跡と判断した。

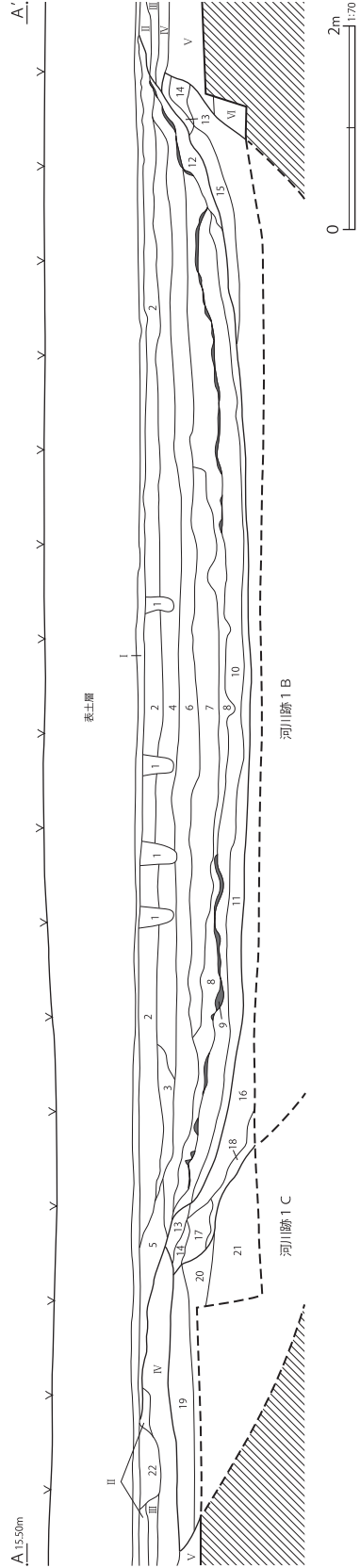
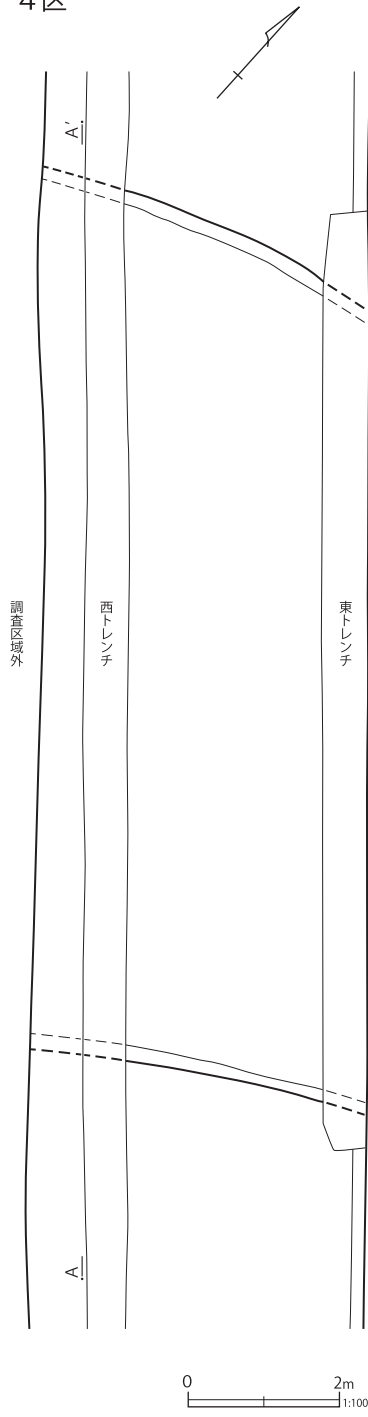
1区は沼地・河川跡が5箇所検出された。最大のもの3区寄りのHH-30～OO-36グリッドに位置する長さ約89mの沼地1である。また、2区寄りのHHH-51～PPP-59グリッドに4箇所の沼地・河川跡が近接して検出されたことから、

下層に大規模な埋没河川流路の存在を示唆する。

3区では北西部から中央部にかけて長さ約88mの沼地4と、南東端の河川跡3が検出された。河川跡3は長さ約27mで、1区との境界付近のZ-23～BB-25グリッドに位置し、3区水田跡6・7の水田面の一部を壊す。調査区西側壁面の土層観察では、中世面まで堆積層が及んでいないことから、古代末以前に埋没していたようである。

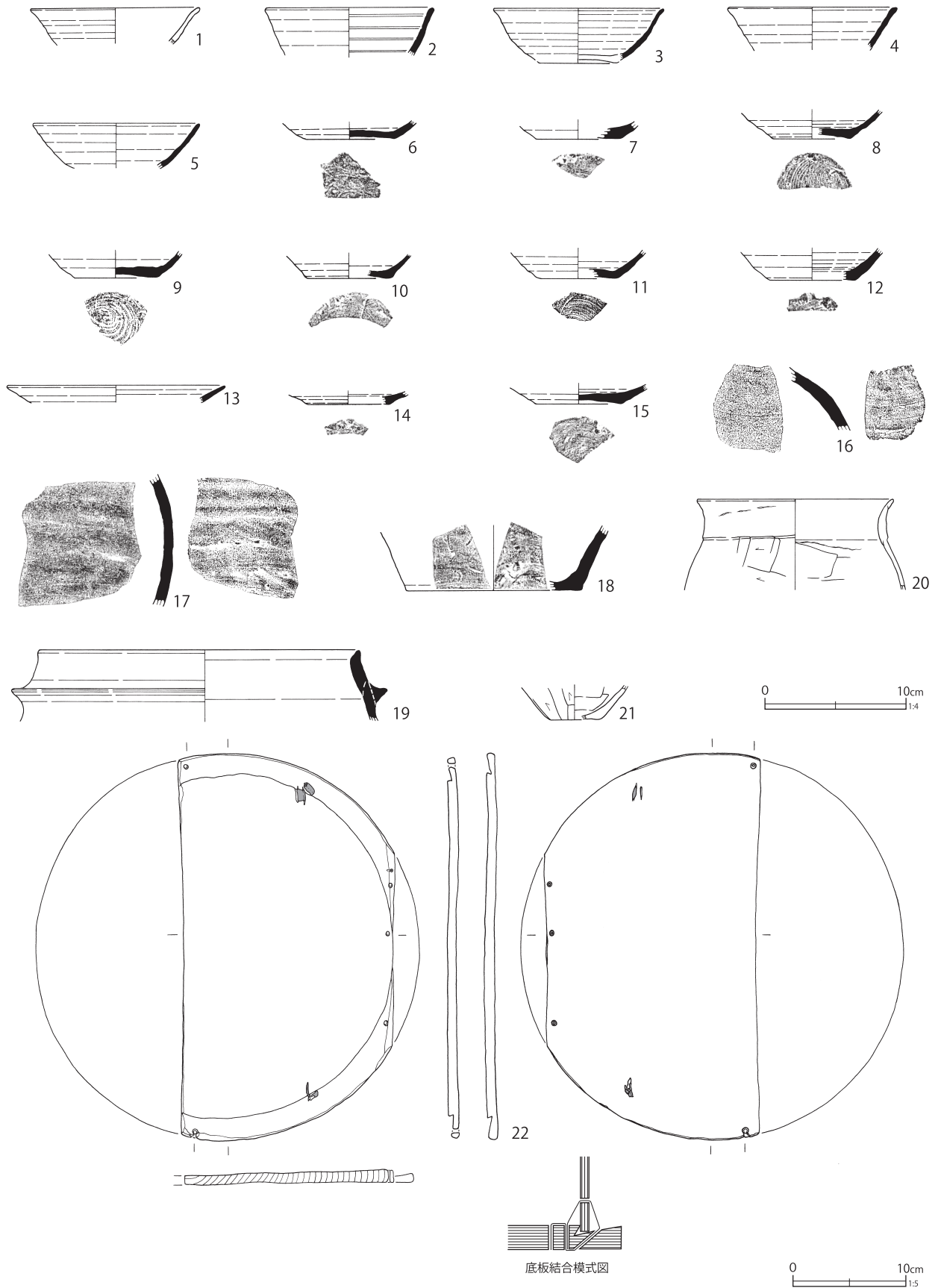
4区では中央部に河川跡1、南東端に河川跡2が検出された。河川跡1は断面観察の結果(古)1C→1B→1A(新)という3段階の埋没過程が想定された(第25図)。1Aは上層の6層に平安時代の遺物、9層に浅間B軽石、下層の10・11層には滞水状態を示す植物繊維を含んでいた。1Bは、砂礫質の土砂を主体とし、流水状態にあったことが明瞭であった。河川跡2はH-8～J-9グリッドに位置し、長さは22m以上となる。

4区



- 河川跡 1
- I 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン少量 斑状に含む しまり強い 粘性やや強い
 - II 暗灰褐色土 酸化鉄少量 マンガン集積多量 白色粒子 (浅間A軽石) 少量 (近世水田層)
 - III 灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 斑状に含む (中世水田層)
 - IV 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 (古代水田層)
 - V 灰白色土 酸化鉄・マンガン上層に多く含む (古代水田層)
 - VI 暗灰褐色土 (河川堆積層か)
 - (河川跡 1 A)
 - 1 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン少量 しまり強い 粘性やや強い (ピット埋土)
 - 2 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン集積に含む しまり強い 粘性やや強い
 - 3 灰褐色土 酸化鉄・マンガン斑状に含む しまりやや強い 粘性強い
 - 4 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン斑状に含む しまり強い 粘性やや強い
 - 5 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い
 - 6 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン下層に含む しまりやや強い 粘性強い
 - 7 青灰色土 灰白色土ブロック多量 しまりやや強い 粘性強い
 - 8 黒灰色土 灰白色土ブロック (φ1~3cm) 少量 斑状に含む しまりやや強い 粘性強い
 - 9 灰白色土 浅間B軽石細層 透切れ透切れに堆積 しまりやや強い 粘性強い
 - 10 黒褐色土 植物繊維 (ヨシ) 多量 下面に堆積 しまりやや強い 粘性強い
 - 11 暗褐色土 植物繊維 (ヨシ) 少量 しまりやや強い 粘性強い
 - 12 黒褐色土 灰白色土ブロック (φ1~5cm) 少量 しまりやや強い 粘性強い
- 表土層
- 1 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン少量 しまりやや強い 粘性やや強い
 - 2 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン少量 しまりやや強い 粘性強い
 - 3 暗灰褐色土 粘性 酸化鉄・マンガン極少量 しまり強い 粘性強い
 - 4 暗褐色土 粘性 酸化鉄・マンガン少量 しまり強い 粘性強い
 - 5 暗褐色土 粘性 下層に砂礫 (φ5mm前後) 堆積 しまり強い 粘性強い
 - 6 青灰色土 粘性 目の細かい砂粒 (φ1mm以下) を含む しまりやや強い 粘性強い
 - 7 青灰色土 砂質 目の粗い砂粒 (φ1~2mm) を均質に含む しまりやや強い 粘性強い
 - 8 灰白色土 砂質 酸化鉄多量 マンガン少量 しまりやや強い 粘性やや弱い
 - 9 灰白色土 砂質 しまりやや強い 粘性強い
 - 10 暗褐色土 砂質 礫を含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
 - 11 暗褐色土 砂質 礫を含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
 - 12 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い
- 河川跡 1 B)
- 13 暗灰褐色土 灰白色土ブロック主体 酸化鉄・マンガンやや多量 しまりやや強い 粘性強い
 - 14 暗灰褐色土 灰白色土ブロック主体 酸化鉄・マンガン少量 しまりやや強い 粘性強い
 - 15 暗褐色土 粘性 酸化鉄・マンガン極少量 しまり強い 粘性強い
 - 16 暗褐色土 粘性 下層に砂礫 (φ5mm前後) 堆積 しまり強い 粘性強い
 - 17 青灰色土 砂質 目の細かい砂粒 (φ1mm以下) を含む しまりやや強い 粘性強い
 - 18 灰白色土 砂質 目の粗い砂粒 (φ1~2mm) を均質に含む しまりやや強い 粘性強い
- 河川跡 1 C)
- 19 灰白色土 砂質 酸化鉄多量 マンガン少量 しまりやや強い 粘性やや弱い
 - 20 青灰色土 砂質 しまりやや強い 粘性強い
 - 21 暗褐色土 砂質 礫を含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
 - 22 暗灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 しまりやや強い 粘性やや強い

第25図 4区河川跡 1



第26图 4区河川跡1出土遺物

第5表 4区河川跡1出土遺物観察表(第26図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	河川跡1	ロクロ土師器	坏	(12.0)	[2.5]	—	EHIK	10	普通	橙	内外面摩耗 F-6G	8-4	
2	河川跡1	須恵器	坏	(11.8)	[3.3]	—	IK	5	普通	灰白	南比企産か 内面沈線状のロクロ目 F-6G	8-4	
3	河川跡1A	須恵器	坏	(12.0)	[3.5]	—	EIJK	10	普通	灰	南比企産 6層 (G-6G)	8-4	
4	河川跡1A	須恵器	坏	(11.8)	[3.0]	—	IJK	10	普通	灰	南比企産 6層 (G-6G)	8-4	
5	河川跡1A	須恵器	坏	(11.8)	[3.1]	—	IJK	5	良好	灰	南比企産 6層 (G-6G)	8-4	
6	河川跡1A	須恵器	坏	—	[1.1]	(6.0)	EHIJ	15	普通	にふい黄橙	南比企産 底部回転糸切り 酸化焰焼成 6層 (G-6G)	8-4	
7	河川跡1	須恵器	坏	—	[1.2]	(6.0)	AEIKL	15	良好	灰	産地不明 底部回転糸切り F-6G	8-4	
8	河川跡1A	須恵器	坏	—	[2.0]	(5.6)	EHIJK	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 6層 (F-6G)	8-4	
9	河川跡1A	須恵器	坏	—	[1.8]	(6.0)	EIJK	25	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り 6層 (F-6G)	8-4	
10	河川跡1A	須恵器	坏	—	[1.6]	(6.0)	HIJK	30	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 6層 (G-6G)	8-4	
11	河川跡1A	須恵器	坏	—	[1.9]	(6.0)	IJK	20	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り 6層 (G-6G)	8-4	
12	河川跡1	須恵器	坏	—	[2.2]	(6.0)	HIK	15	普通	灰白	南比企産か 底部回転糸切り 東側トレンチ	8-4	
13	河川跡1A	須恵器	皿	(15.4)	[1.2]	—	HIJK	10	普通	灰白	南比企産 浅間B 軽石直下	8-4	
14	河川跡1A	須恵器	皿	—	[0.9]	(5.8)	EHIJ	15	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 浅間B 軽石直上	8-4	
15	河川跡1	須恵器	皿	—	[1.4]	(6.0)	EHIK	20	普通	灰	南比企産か 底部回転糸切り 東側トレンチ	8-4	
16	河川跡1A	須恵器	瓶類	—	[4.4]	—	IJK	5	良好	灰	南比企産 外面降灰 6層 (G-6G)	8-4	
17	河川跡1A	須恵器	瓶類	—	[9.3]	—	IJK	5	良好	灰	南比企産 外面上半降灰 6層 (G-6G)	8-4	
18	河川跡1A	須恵器	甕	—	[4.5]	(12.4)	HIJK	10	普通	灰	南比企産 6層 (F-6G)	8-4	
19	河川跡1A	須恵器	羽釜	(21.8)	[5.0]	—	CEIK	5	良好	灰	産地不明 還元焰焼成 東側トレンチ7層	8-4	
20	河川跡1B	土師器	小型甕	(14.0)	[6.3]	—	CGHIK	15	普通	にふい赤褐	台付甕か 西側トレンチ16層	8-4	
21	河川跡1A	土師器	甕	—	[2.4]	(3.6)	CHIK	20	普通	灰褐	外面ヘラケズリ 6層 (F-6G)	8-4	
22	河川跡1B	木製品	曲物底板	長さ 34.1 cm 幅 [18.5] cm 厚さ 11.5 cm 重さ 98.3 g				樺皮紐 2箇所 木釘孔1個 円孔5個		内外面切傷 西側トレンチ16層			8-3

4区河川跡1出土遺物 (第26図1～22)

1はロクロ土師器坏、2～12は須恵器坏、13～15は須恵器皿、16・17は須恵器瓶類、18は平底の須恵器甕、19は須恵器羽釜である。須恵器は、胎土に白色針状物質が含まれ、南比企窯跡群の製品がほとんどである。時期は、底部回転糸切り離した後未調整の須恵器坏が主体となることから、9世紀後半から10世紀初めに位置づけられる。

20・21は土師器甕である。20はコの字状口縁甕で、還元口径14.0cmの小型品であることから、台付甕であろう。

22は直径34.1cmの円形曲物の底板で、両端部を

欠損する。円板の上に一回り小さい側板をあてて、円板に2孔1対、側板に1孔の結合孔を開け、樺皮紐(山桜の樹皮の紐)で結合する「樺皮結合曲物」である。円板内面の周縁を一段低く造り、ここに側板を立てたカキゾコである。欠損部には補修孔と考えられる6個の円孔が認められた。図示した左側欠損部の両端に2孔1対の円孔、右側欠損部には上から木釘の打ち込まれた円孔、3個の貫通する円孔が一行に並んでいた。円板の内外面とも刃物による切傷が認められる。特に外面は切傷を多く留めることから、破損、補修後、最終的に板材として転用された可能性もある。

5. グリッド出土遺物

表土掘削及び遺構確認時に、各調査区から縄文時代中期・後期の土器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世から近代の陶器・土師質土器が出土した（第27図1～13）。

1は縄文時代中期前半の勝坂式土器で、半截竹管による刺突を施す。2は縄文時代後期前葉の堀之内式土器で、縦位の沈線を施文する。

3は有段口縁の壺形土器の口縁部片で、古墳時代前期、五領式期終末の所産であろう。

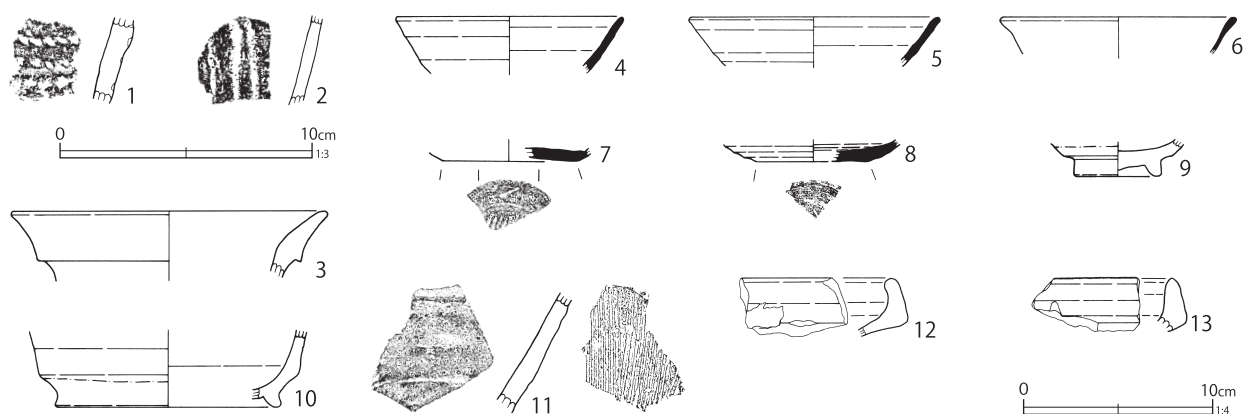
4～7は須恵器環で、すべて南比企産である。6は軟質の焼き上がりである。7は底部を回転糸

切り後、周辺ヘラケズリを施す。

8は須恵器皿で、底部に回転ヘラケズリを施す。胎土に白色針状物質を含む南比企産の製品である。

9は内外面に鉄釉を掛けた瀬戸美濃産の天目茶碗で、削り出し高台である。10は高台脇から屈曲して立ち上がる筒形の器形をした半胴甕で、内外面に鉄釉を掛ける。産地は不明である。11は堺・明石系の摺鉢である。内面の摺目は細かい。

12・13は浅身の焙烙である。底部が丸底になるもので、13は口縁部の外面に煤が一部付着する。近代の所産であろう。



第27図 グリッド出土遺物

第6表 グリッド出土遺物観察表(第27図)

番号	地区	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	1区	縄文土器	深鉢	—	[5.4]	—	HI	5	普通	にぶい赤褐	中期(勝坂式土器)半截竹管による刺突	8-2
2	1区	縄文土器	深鉢	—	[3.5]	—	EHI	5	普通	褐灰	後期(堀之内式土器)沈線	8-2
3	1区	土師器	壺	(16.6)	[3.6]	—	EHIK	10	普通	明褐	有段口縁壺 五領式期終末	8-5
4	1区	須恵器	坏	(12.0)	[2.9]	—	EHIJK	10	普通	灰	南比企産	8-5
5	4区	須恵器	坏	(13.0)	[2.6]	—	EIJK	5	良好	灰	南比企産	8-5
6	4区	須恵器	坏	(12.4)	[1.9]	—	IJK	5	不良	灰黄	南比企産 軟質 器面剥離	8-5
7	1区	須恵器	坏	—	[0.7]	(7.0)	IJK	20	良好	白灰	南比企産 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ	8-5
8	1区	須恵器	皿	—	[1.1]	(6.0)	EIJK	15	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	8-5
9	1区	陶器	天目茶碗	—	[1.9]	4.4	HI	60	普通	灰白	瀬戸美濃産 鉄釉 削り出し高台	8-5
10	3区	陶器	半胴甕	—	[4.0]	(11.8)	EHIK	10	普通	にぶい黄褐	産地不明 鉄釉 19C	8-5
11	1区	陶器	摺鉢	—	[6.3]	—	DEHIK	5	普通	にぶい赤褐	堺・明石系 18C後半～19C	8-5
12	3区	土師質土器	焙烙	—	[3.0]	—	CHIK	5	普通	にぶい赤褐	近代	8-5
13	1区	土師質土器	焙烙	—	[2.7]	—	HIK	5	普通	褐灰(外面) にぶい橙(内面)	近代 外面煤付着	8-5

V 調査のまとめ

調査の成果

西吉見条里遺跡第23地点の調査は、市野川と吉見丘陵に挟まれた、扇形の遺跡範囲の南西縁に約1kmの細長いトレンチを、市野川に沿って入れた格好である。調査区の制約により、遺構群を面的に把握することはできなかったが、標高14m前後の微高地上に営まれた奈良・平安時代の水田跡や溝跡をはじめ、微高地を浸食する河川跡、後背湿地に点在した沼地を確認することができた。その結果、市野川の上流側に位置する平安時代の集落跡（第1地点及び平成16年度調査地点）の南側に、水田域が広がる景観がおぼろげながら見えてきた。

水田跡について

市野川の形成した扇状地状の沖積低地に立地する西吉見条里遺跡は、その名が示すように遺跡周辺に、古代の人々の生活を支えた条里制が施行された地域として知られている。

かつて原島礼二は、ほ場整備以前の地形地図や地籍図、関連地名等の検討をもとにして、比企・横見・大里郡内の条里型地割について復元を試みた（原島1978）。原島は、市野川の東西兩岸を含めた本遺跡周辺部を「都幾川北岸の条里」と呼び、南北軸線が東にやや振れる条里型地割を想定している（第3図）。さらに、この条里の坪並は横見郡型とした条（坪）の方向づけとは異なり、比企郡型を示すことから、吉見町の南吉見地区は古代において比企郡に属していたとする仮説を示した。

今回の調査で発見された水田跡は、整然と区画

された水田面が広がっているとはいえないが、一辺19～22mの方形を基調とする水田区画から構成され、土層観察や出土遺物の検討から奈良・平安時代に造られたものと判断された。3区北西端に位置する第5号溝跡の堤状盛土遺構が大畦畔となる可能性は残されているものの、これらの水田跡が条里水田の一部を構成していたかどうかは、隣接地の調査の成果をまって再考したい。

最後に、3区水田跡1から出土した北武蔵型坏について着目し、本遺跡東端を走る古代道路跡と条里制の施行時期との関連について触れてみたい。

律令国家において駅路の建設目的は、中央と、地方に置かれた中央の支配拠点とを最短距離で結ぶことにあったといえるが、同時に平野部を走る直線的な道路は、土地区画の基準線としての役割も果たしていた（近江2012）。

水田面から出土した一片の土器片の帰属に関しては慎重にならざるを得ないが、時期的な符合から推して、東山道武蔵路もしくは国府と郡家間を結ぶ伝路（原2008）と想定されている道路跡の建設と条里制の施行が一体の事業として導入され、地域開発が大きく進展したことは想像に難くない。しかし、道路跡の推定ラインは原島の復元した条里型地割の方位よりさらに東へ振れており、実態の解明に関して大きな課題を残している。

今後は、条里制の施行を裏づける具体的証拠を積み上げ、道路跡の建設と条里制施行の歴史的意義を地域史の中に位置づけることが必要である。

引用・参考文献

- 磯崎 一 2005『西吉見条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第312集
- 太田賢一 2005『西吉見条里遺跡―第1分冊―』吉見町埋蔵文化財調査報告書 第2集 吉見町教育委員会
- 近江俊秀 2012『道が語る日本古代史』朝日選書889 朝日新聞出版
- 大矢雅彦他 1996『荒川流域地形分類図（その2）』建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
- 永井智教 2002「西吉見古代道路跡―西吉見条里Ⅱ遺跡発掘調査概報―」『原始・古代の吉見1』吉見町教育委員会
- 原 京子 2008「古代武蔵国における駅伝路の考察―西吉見条里Ⅱ遺跡の古代道路跡の性格をめぐって―」『あらかわ』第11号
- 原島礼二 1978「東松山市と周辺の古代一条里遺構調査を基にして」『市史編さん調査報告』第13集 東松山市
- 藤野一之 2014「東山道武蔵路と関連遺跡の調査について」『東国における古代遺跡の調査報告』

写真図版



1 西吉見条里遺跡第 23 地点 (合成)

図版 2



1 西吉見条里遺跡遠景（南から）



5 1区近景（南から）



2 西吉見条里遺跡遠景（南東から）



6 1区全景（南から）



3 西吉見条里遺跡近景（南から）



7 2区全景（北から）



4 西吉見条里遺跡近景（西から）



8 2区全景（南から）



1 3区近景 (西から)



5 4区全景 (北から)



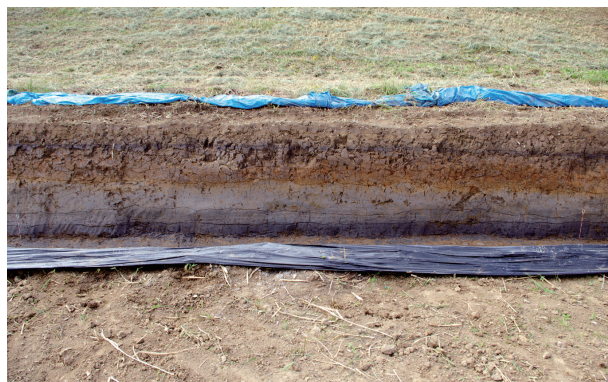
2 3区全景 (北から)



6 4区全景 (南から)



3 3区全景 (南から)



7 1区西壁土層断面 (VV - 41・42G 周辺)



4 4区近景 (南から)

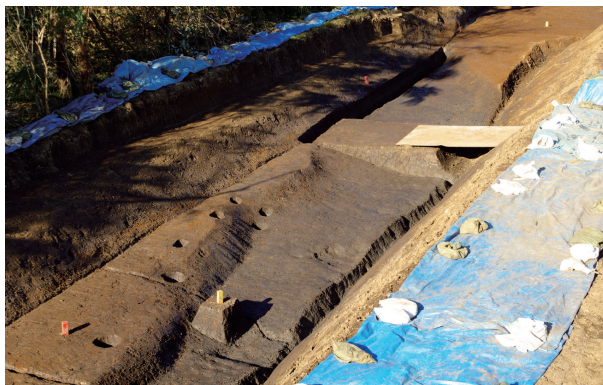


8 1区西壁土層断面 (000 - 57・58G 周辺)

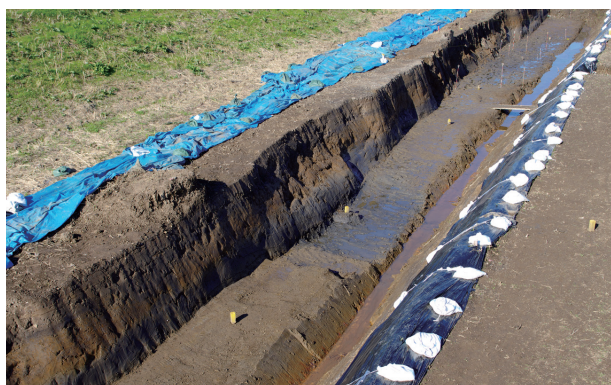
图版 4



1 第1号沟迹



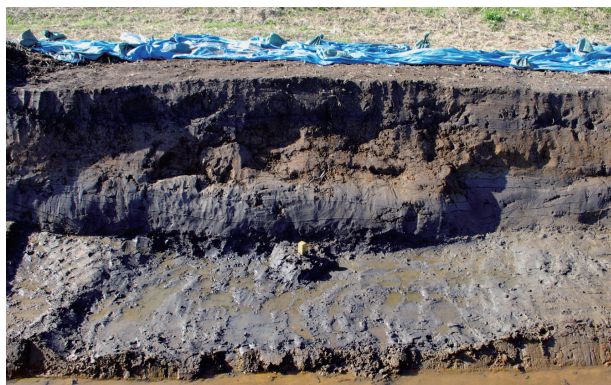
5 第4号沟迹



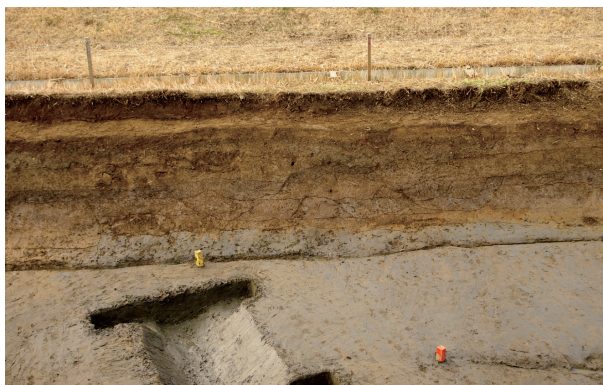
2 第2号沟迹



6 第5号沟迹



3 第2号沟迹土层断面



7 第5号沟迹土层断面



4 第3号沟迹



8 第6号沟迹



1 第7号沟迹



5 第12号沟迹



2 第8·9号沟迹



6 第1号土壤



3 第10号沟迹



7 第2号土壤



4 第11号沟迹



8 第3号土壤

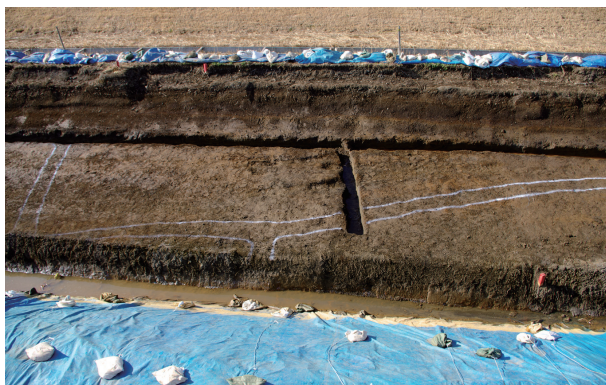
図版 6



1 3区水田跡全景



5 4区水田跡 2 (1)



2 3区水田跡 1



6 4区水田跡 2 (2)



3 3区水田跡 2~4



7 4区水田跡 4 (1)



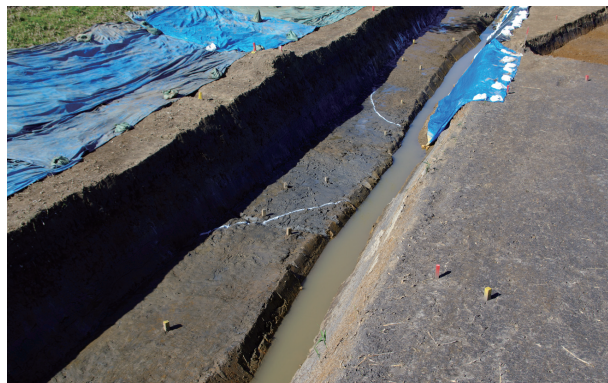
4 4区水田跡 1



8 4区水田跡 4 (2)



1 4区水田跡 5



5 1区河川跡 4



2 4区水田跡 6~8



6 4区河川跡 1



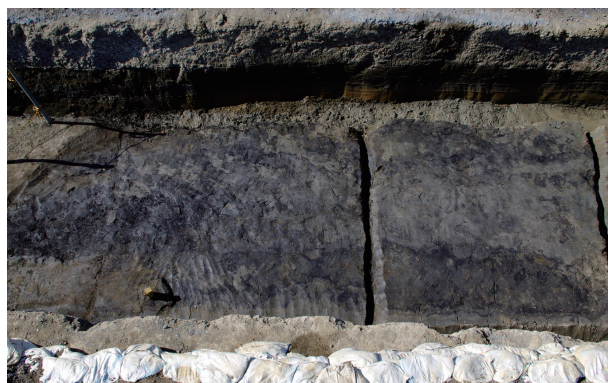
3 4区水田跡 8・9



7 4区河川跡 1 木製品出土状況



4 1区沼地 3



8 4区河川跡 2

図版 8



1 3区水田跡1 (第20図1)



2 縄文土器 (第27図1・2)



3 4区河川跡1 (第26図22)



4 4区河川跡1 (第26図1～21)



5 グリッド (第27図3～13)

報告書抄録

ふりがな	にしよしみじょうりいせきに							
書名	西吉見条里遺跡Ⅱ							
副書名	社会資本整備総合交付金（河川）工事関係埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第415集							
編著者名	大谷 徹							
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2015（平成27）年2月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしよしみじょうりいせき 西吉見条里遺跡 (第23地点)	さいたまけんひきぐんよしまち 埼玉県比企郡吉見町 おおあざにしよしみ ばんちほか 大字西吉見425番地他	11347	47	36° 01' 35"	139° 25' 52"	20120901 ～ 20130329	5,261.2	河川改修
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西吉見条里遺跡 (第23地点)	集落跡 条里跡	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世 時期不明	溝跡 4条 溝跡 7条 水田跡 16区画 河川跡 1箇所 溝跡 1条 土壇 3基 沼地・河川跡 8箇所	土師器 土師器・須恵器・木製品 陶器・土器		条里関連の遺構群		
要約	<p>西吉見条里遺跡は、市野川と吉見丘陵に挟まれた市野川左岸の沖積低地に立地している。今回の調査では旧河川の浸食をまぬがれた微高地上から古墳時代の溝跡をはじめ、奈良・平安時代に営まれた水田跡や溝跡が検出され、古代条里制との関連性を検討する手がかりが得られた。天仁元年(1108)の浅間B軽石が埋土上層に堆積した河川跡からは、9世紀後半から10世紀にかけての須恵器や土師器のほかに、曲物の底板が出土した。</p>							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第415集

西吉見条里遺跡Ⅱ

社会資本整備総合交付金（河川）工事関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成27年2月16日 印刷

平成27年2月23日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話0493(39)3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社 文化新聞社